柔道科学研究

Scientific Research on Judo

第15号　2010

全国中学校柔道大会出場選手の体力について（2）―2000年～2009年における体力の現状及び階級別比較― …… 1
村山晴夫、射手矢　岬、小山勝弘、佐藤伸一郎、石川美久、横山喬之、
大迫明伸 、野瀬清喜

2007年世界柔道選手権大会における外国人選手の競技傾向 …… 9
石川美久、佐藤伸一郎、村山晴夫、坂本道人、横山喬之、西田孝宏、金丸雄介、
中西英敏、小嶋新太

国際大会の日本人選手の試合展開について …… 13
射手矢　岬、谷口一真、佐藤伸一郎、山本洋祐、正木嘉美、岡田弘隆、
篠原信一、園田隆二

全日本女子強化選手の体力タイプ別分類によるトレーニング目標の作成 …… 19
曽我部晋哉、園田隆二、田辺　勝、徳野和彦、吉村和郎、日蔭暢年、斉藤　仁、
木村昌彦、白瀬英春、出口達也、南條充寿、貝山仁美、薪谷　翠、野瀬清喜、
三戸範之、松雪　博、渡辺涼子、園田教子、射手矢　岬、小山勝弘

資　料
International Judo Symposium on Sports Medicine and Science …… 23

柔道史年表　1966→1975 …… 36
渡邉昌史

㈶全日本柔道連盟強化委員会情報戦略部
（旧 科学研究部）

柔道科学研究 , 15, 1-8 (2010)

全国中学校柔道大会出場選手の体力について（2）
―2000年～2009年における体力の現状及び階級別比較―

村山晴夫 [1)]、射手矢　岬 [2)]、小山勝弘 [3)]、佐藤伸一郎 [4)]、石川美久 [5)]、横山喬之 [5)]、
大迫明伸 [6)]、野瀬清喜 [7)]

Physical strength of participants in the national junior high school judo tournament (2)
−Current state of physical strength and comparisons among weight divisions from 2000 to 2009−

Haruo MURAYAMA [1)], Misaki ITEYA [2)], Katsuhiro KOYAMA [3)], Shinichiro SATOH [4)],
Yoshihisa ISHIKAWA [5)], Takayuki YOKOYAMA [5)], Akinobu OSAKO [6)], Seiki NOSE [7)]

Abstract

This study aims at obtaining new knowledge concerning physical strength. The survey was carried out on 5,824 junior high school students, 2,876 boys and 2,948 girls, who participated in the national junior high school judo tournament for 10 years from 2000 to 2009. Their current physical strength (height, weight, body fat ratio, lean body mass, back strength, grip strength, vertical jump, vital capacity, sit-ups, sitting trunk flexion, and jumping reaction time) was measured and comparisons were made among different weight divisions. As a result, some findings have been obtained.
Key word（junior high school, physical strength, weight category,）

Ⅰ. 緒言

2000年より、従来、男女各４階級で実施されていた個人戦が７階級となり10年が経過した。この全国中学校柔道大会は、第１回大会が1970年に行われ、昨年、区切りとなる第40回大会が沖縄県那覇市にて開催された。まさに、中学柔道選手とっては、日々の練習の成果を発揮できる貴重な場であり、これまでもオリンピック、世界選手権大会等で活躍する選手を多数輩出してきている。

全日本柔道連盟強化委員会は、長期的な選手強化の観点からジュニア対策の一環として、全国中学校柔道大会に出場した選手を対象に、1982年より体力測定を実施してきている[10)]。そして、それらの測定結果からは、さまざまな知見が報告されてきた[1、2、4、5、7、8、9、10,11)]。

これまで、７階級変更後における分析について、村山ら[5)]が報告しているが、 10年間にわたる測定データが蓄積されてきたこともあり、それらを改めて分析し、体力の現状把握かつ新たな知見を得ることを本研究の目的とした。

Ⅱ. 研究方法

1. 分析対象者

2000年から2009年（10ヶ年）における全国中学校柔道大会個人戦に出場し、且つ体力測定をした男子2,876名及び女子2,948名の合計5,824名。

2. 体力測定項目

形態項目は、身長、体重、体脂肪率、除脂肪体重を測定した。機能項目については、背筋力、握力（右）、握力（左）、垂直跳、肺活量、上体起こし、長座体前屈、全身反応時間の測定を行った。なお、肺活量において、2009年（沖縄大会）は新型インフルエンザ流行のため、感染防止を理由に測定は実施しておらず、この項目のみ2000年～2008年までのデータを用いることとした。

なお、測定実施の手順については大会当日、試合が終了した者より会場内別室にて随時行った。

3. 分析方法

性別、各階級及び測定項目ごとに平均値と標準偏差を求め、比較検討をした。統計処理については、一元配置分散分析法を用いて行い、有意差が認められた場合には多重比較を行った。その際の統計学的有意水準に

１）獨協医科大学　２）東京学芸大学　３）山梨大学　４）拓殖大学　５）筑波大学　６）旭化成　７）埼玉大学

ついては、$p<0.05$とした。

Ⅲ. 結果及び考察

男女別による「階級別における各測定項目の平均値及び標準偏差」を表1～2に示した。

1. 男子選手

各項目別における「平均値及び標準偏差」について、図1～図12に示し、「男子階級及び各測定項目における多重比較一覧」を表3に示した。

【身長】　81kg級と73kg級、90kg級の各階級間を除く、他の階級間において有意差が認められ、階級が上がるのに伴い値も増加する傾向が示された。

【体重】【体脂肪率】【除脂肪体重】　階級が上がるとともに値も増加し、全階級間において有意差が認められた。

【背筋力】　階級が上がるのに伴い値も増加する傾向を示し、73kg級と66kg級、81kg級の各階級間及び90kg級と90kg超級における階級間を除く、他の階級間において有意差が認められた。体重の重い上位2階級が他の階級に比べ高値を示す結果となり、筋力の強さが明らかとなった。

【握力(右)】【握力(左)】　81kg級と73kg級、90kg級の各階級間を除く、他の階級間において有意差が認められ、階級が上がるにつれ値も増加し、左右が同様であることも明らかとなった。

【垂直跳】　階級が上がるのに伴い値は減少していく傾向を示し、55kg級、60kg級、66kg級、73kg級の各階級間を除く、他の階級間において有意差が認められた。この結果から、体重が軽い方からの4階級について、瞬発力には差がないことが示唆された。また、体重が重い階級ほど低値を示した理由として、測定実施の際、自重が負荷となるために、このような結果を生じさせている要因の一つであることが窺われる。

【肺活量】　階級が上がるのに伴い値の増加が示され、66kg級と73kg級における階級間及び81kg級、90kg級、90kg超級の各階級間を除く、他の階級間において有意差が認められた。

【上体起こし】　55kg級と60kg級、66kg級、73kg級の各階級間、66kg級と60kg級、73kg級の各階級間及び81kg級と73kg級、90kg級の各階級間を除く、他の階級間において有意差が認められ、階級が上がるにつれ値は減少する傾向が示された。この結果から、90kg超級は全階級と比べ低値を示し、筋持久力が劣っているとの示唆を得たが、垂直跳と同様、自重が負荷となるための影響も少なからず考えられ、今後の検討課題にあげられよう。

【長座体前屈】　55kg級と66kg級、73kg級、81kg級の各階級間及び90kg超級と60kg級、66kg級、73kg級、81kg級、90kg級の各階級間において有意差が認められた。この項目においては、最軽量階級と最重量階級が低値を示したことになり、すなわち、柔軟性について劣ることが示唆された。また、同様の結果が先行研究[5)]にて報告されており、身長、上肢長、下肢長、腹囲等の形態構造の相違が反映されている可能性も否めず、なぜこのような測定結果が出たのか解明していく必要があろう。

【全身反応時間】　階級が上がるごとに値も増加し、55kg級、60kg級、66kg級、73kg級の各階級間及び81kg級と73kg級、90kg級の各階級間を除く、他の階級間において有意差が認められ、また、90kg超級は他のすべての階級間において有意差が認められた。すなわち、90kg超級の反応時間の遅延がついて明らかとなり、調整力について劣ることが示唆された。しかし、この項目についても自重が負荷となるための影響が窺われるため、このような結果をもたらしているとの推測もできる。

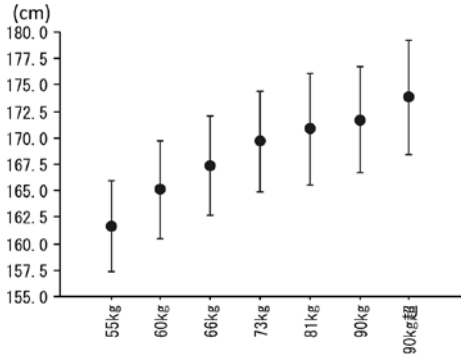

図1　身長の平均値及び標準偏差(男子)

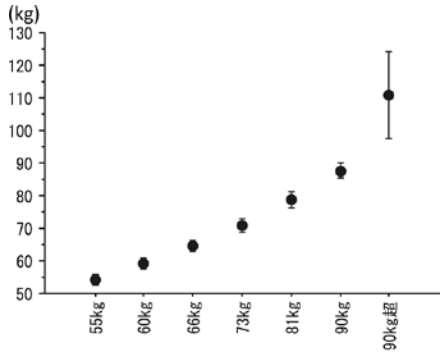

図2　体重の平均値及び標準偏差(男子)

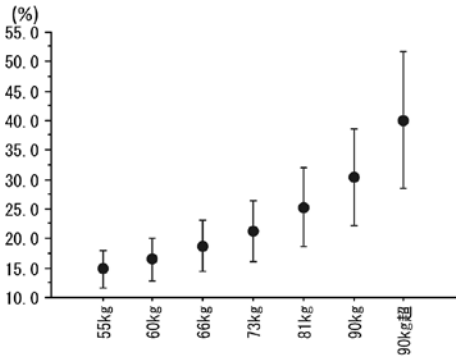

図3　体脂肪率の平均値及び標準偏差(男子)

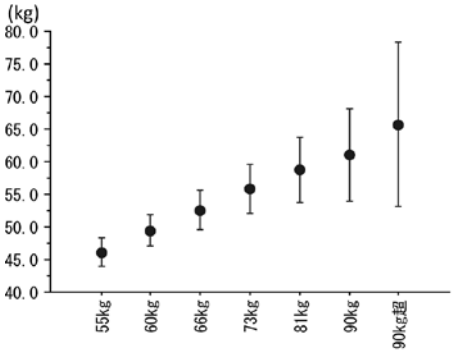

図4　除脂肪体重の平均値及び標準偏差(男子)

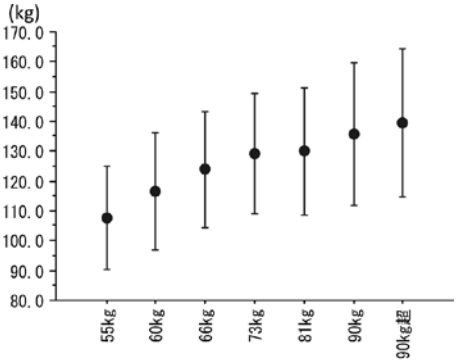

図5　背筋力の平均値及び標準偏差(男子)

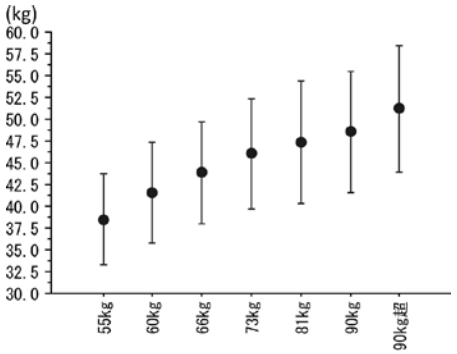

図6　握力【右】の平均値及び標準偏差(男子)

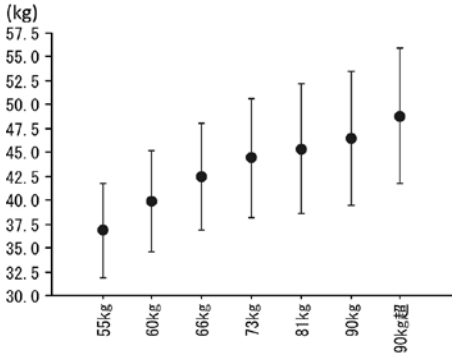

図7　握力【左】の平均値及び標準偏差(男子)

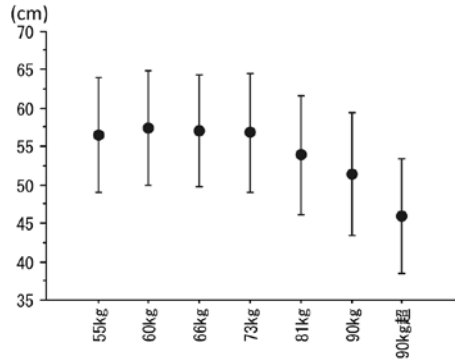

図8　垂直跳の平均値及び標準偏差(男子)

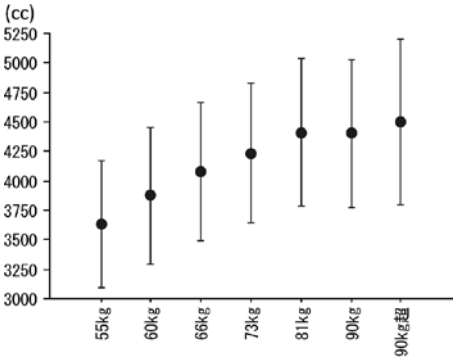

図9　肺活量の平均値及び標準偏差(男子)

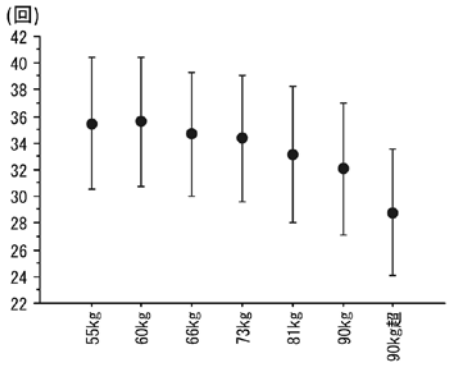

図10　上体起こしの平均値及び標準偏差(男子)

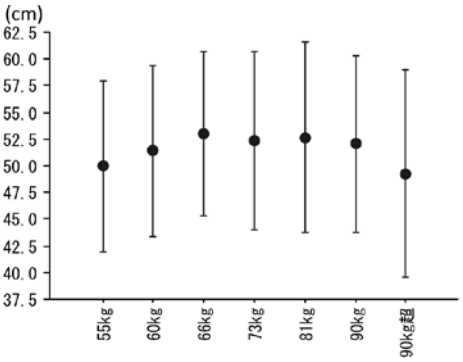

図11　長座体前屈の平均値及び標準偏差(男子)

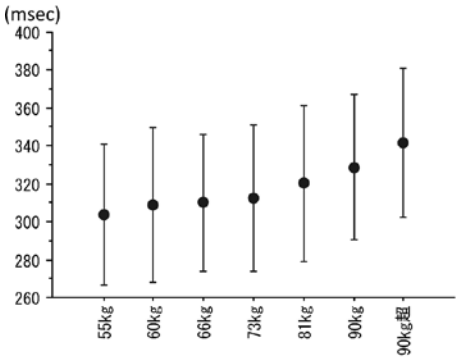

図12　全身反応時間の平均値及び標準偏差(男子)

2. 女子選手

各項目別における「平均値及び標準偏差」について、図13～図24に示し、「女子階級及び各測定項目における多重比較一覧」を表4に示した。

【身長】　階級が上がるのに伴い値も増加していく傾向を示し、63kg級と70kg級における階級間を除く、他の階級間において有意差が認められた。

【体重】【体脂肪率】【除脂肪体重】　階級が上がるのに伴い値も増加し、全階級間において有意差が認められた。

【背筋力】　階級が上がるのに伴い値も増加していく傾向を示し、48kg級と52kg級における階級間、57kg級、63kg級、70kg級の各階級間及び70kg超級と63kg級、70kgの各階級間を除く、他の階級間において有意差が認められた。すなわち、体重が重い上位3階級間において相違はないが、それらと体重の軽い階級とでは顕著な差が生じており、筋力の違いが明らかとなった。

【握力(右)】　63kg級と70kg級における階級間を除く、他の階級間において有意差が認められ、階級が上がるにつれ値が増加する傾向であった。

【握力(左)】　階級が上がるのに伴い値も増加する傾向を示し、63kg級と57kg級、70kg級の各階級間を除く、他の階級間において有意差が認められた。

【垂直跳】　階級が上がるのに伴い値は減少していく傾向を示し、70kg超級と他のすべての階級間及び70kg級と48kg級、52kg級の各階級間において有意差が認められた。すなわち、70kg超級は他の階級と比較し、瞬発力の低さが示唆された。これは、男子の結果と同様であり、測定実施の際、自重が負荷となるために、体重が重い階級ほど低値を示した可能性も推測できよう。

【肺活量】　48kg級と52kg級における階級間及び63kg級と57kg級、70kg級の各階級間を除く、他の階級間において有意差が認められ、階級が上がるほど値も増加していく傾向を示した。

【上体起こし】　70kg超級と他のすべての階級間及び70kg級と44kg級、48kg級、52kg級、57kg級の階級間において有意差が認められた。すなわち、体重が重い上位2階級と他の階級とは明らかな差が生じており、特に70kg超級においては他の階級よりも顕著な差があり、筋持久力の低さが示唆された。男子の結果と同様な傾向を示し、自重が負荷となる影響のため、体重の重い階級ほど低値を示した可能性も否定できない。

【長座体前屈】　44kg級と70kg超級における階級間、48kg級と52kg級、70kg級、70kg超級の各階級間、52kg級と57kg級、63kg級、70kg級の各階級間及び63kg級と57kg、70kg級の各階級間を除く、他の階級間において有意差が認められた。すなわち、男子同様、最軽量階級と最重量階級が低値を示したことになり、形態構造の相違が影響を及ぼしていることが考えられる。

【全身反応時間】　70kg超級と他のすべての階級間及び70kg級と44kg級、48kg級、52kg級、57kg級の階級間において有意差が認められた。この項目においては、70kg級と70kg超級の体重が重い上位２階級における反応時間の遅延について明らかとなり、調整力について劣ることが示唆された。これは、男子の結果と同様であり、自重が負荷となる影響等がこのような結果を導き出しているのかもしれない。

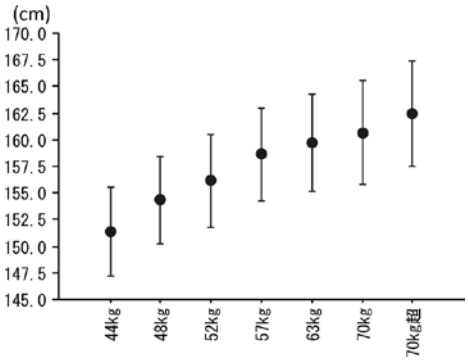

図13　身長の平均値及び標準偏差(女子)

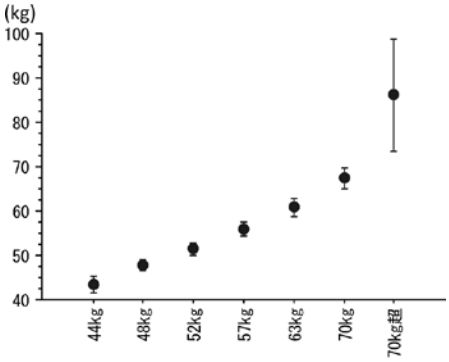

図14　体重の平均値及び標準偏差(女子)

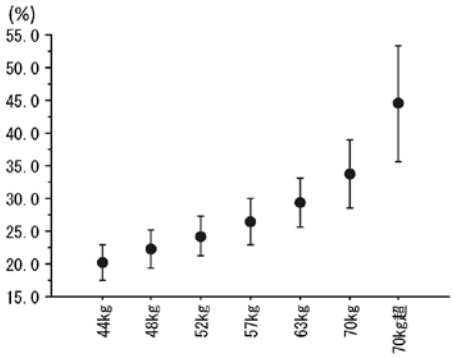

図15　体脂肪率の平均値及び標準偏差(女子)

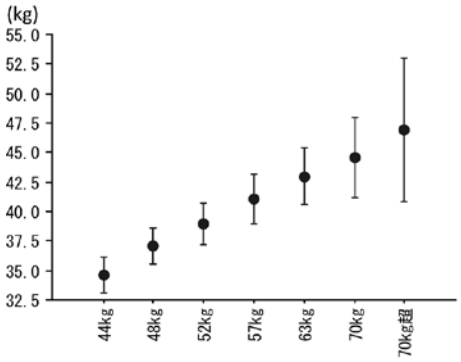

図16　除体脂体重の平均値及び標準偏差(女子)

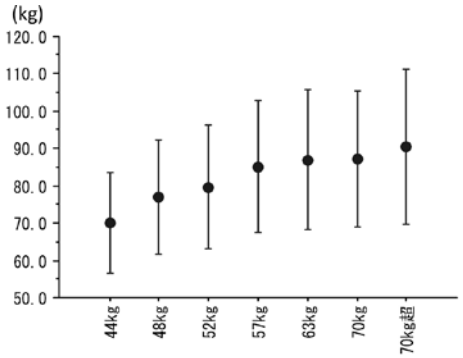

図 17　背筋力の平均値及び標準偏差(女子)

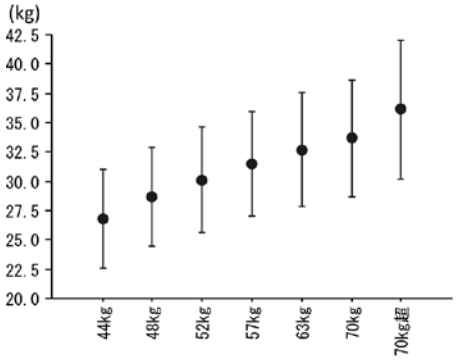

図18　握力【右】の平均値及び標準偏差(女子)

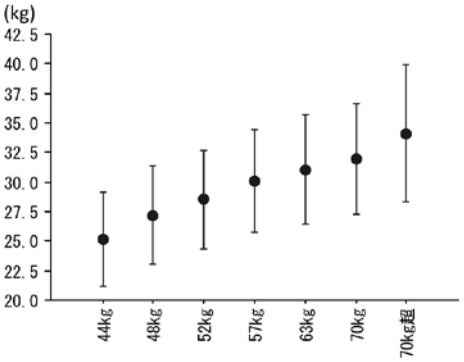

図19　握力【左】の平均値及び標準偏差(女子)

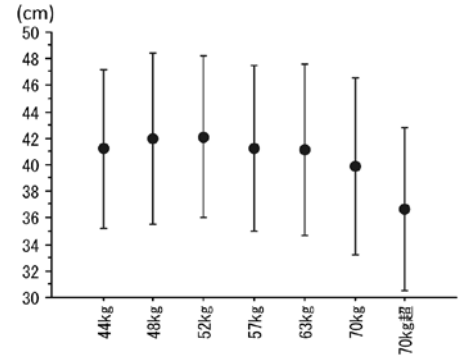

図20　垂直跳の平均値及び標準偏差(女子)

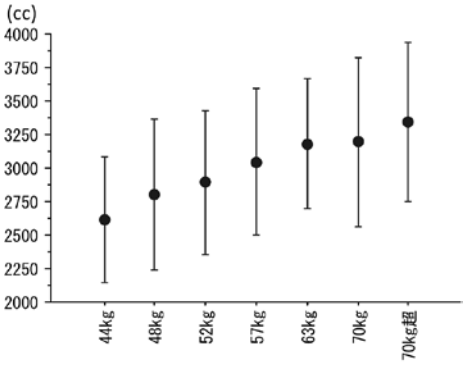

図21　肺活量の平均値及び標準偏差(女子)

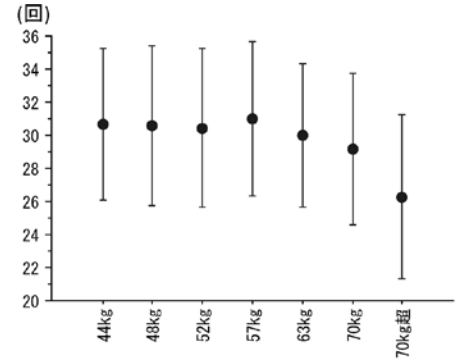

図22　上体起こしの平均値及び標準偏差(女子)

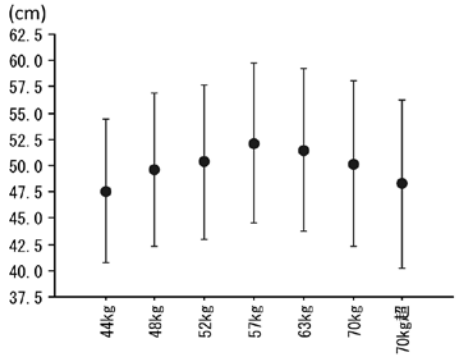

図23　長座体前屈の平均値及び標準偏差(女子)

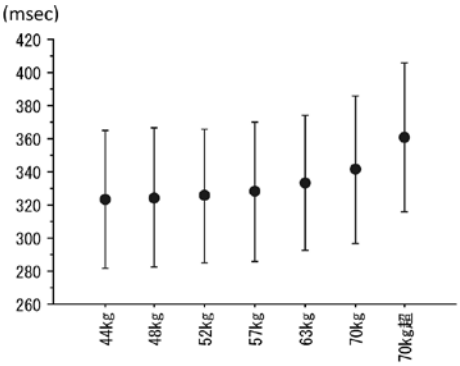

図24　全身反応時間の平均値及び標準偏差(女子)

Ⅳ. 総括

2000年～2009年までの10年間に、全国中学校柔道大会に参加した男子2,876名及び女子2,948名の合計5,824名を対象とし、体力の現状把握かつ新たな知見を得ることであった。主な知見及び今後の検討課題を以下に示した。

1）男女共に、「体脂肪率」「除脂肪体重」の形態項目において、階級が上がるのに伴い値も増加していくことが明らかとなった。

2）「背筋力」「握力」の筋力については、体重の重い階級ほど値が高く、筋力の強さも階級に比例して高値を示した。これらの傾向は男女とも同様であった。

3）男子の「垂直跳」では、軽量4階級（55kg、60kg、66kg、73kg各階級）で差はないが、重量3階級（81kg、90kg、90kg超各階級）と比較すると、顕著な高値を示し、軽量4階級の瞬発力の高さが示された。女子の「垂直跳」でも、男子同様の傾向を示したが、特に70kg超級における瞬発力の低さが顕著であった。

4）「上体起こし」「全身反応時間」の結果からは、階級が上がるのに伴い能力低下の傾向が示された。これは、「垂直跳」も含め、測定実施の際、自重が負荷となるために、体重が重い階級ほど低値を示した可能性が推測される。これらについては男女同様の結果を呈しており、今後、測定データをよく吟味した上で適切な分析処理の方法を模索していく必要性があろう。

5）「長座体前屈」において、男女共、最軽量階級及び最重量階級において低値を示し、他の階級に比べ柔軟性の欠如が示唆された。これについては、身長、上肢長、下肢長、腹囲等の形態構造の相違による影響が考えられ、今後、解明していかなくてはならない重要な検討課題でもあり、より一層の深慮が望まれよう。

表1 男子階級別における各測定項目の平均値及び標準偏差

【男子階級】	身長(cm)			体重(kg)			体脂肪率(%)			除脂肪体重(kg)			背筋力(kg)			握力[右](kg)			握力[左](kg)			垂直跳(cm)			肺活量(cc)			上体起こし(回)			長座体前屈(cm)			全身反応時間(msec		
	人数	平均値	標準偏差	人数	平均値	標準偏差	人数	平均値	標準偏差	人数	平均値	標準偏差	人数	平均値	標準偏差	人数	平均値	標準偏差	人数	平均値	標準偏差	人数	平均値	標準偏差	人数	平均値	標準偏差	人数	平均値	標準偏差	人数	平均値	標準偏差	人数	平均値	標準偏差
55kg	415	**161.6**	4.34	415	**54.1**	1.84	415	**14.9**	3.20	415	**46.1**	2.23	413	**107.8**	17.42	411	**38.5**	5.22	414	**36.8**	4.92	410	**56.5**	7.50	372	**3635.3**	540.85	409	**35.4**	4.95	414	**49.9**	8.04	413	**304.0**	37.23
60kg	420	**165.1**	4.65	420	**59.2**	1.57	420	**16.5**	3.67	420	**49.4**	2.45	414	**116.6**	19.56	419	**41.6**	5.76	416	**39.9**	5.32	416	**57.4**	7.51	373	**3874.9**	578.64	409	**35.6**	4.86	418	**51.4**	8.00	416	**309.0**	40.68
66kg	418	**167.4**	4.63	417	**64.7**	1.68	417	**18.8**	4.35	417	**52.5**	3.03	410	**124.1**	19.45	411	**43.9**	5.84	414	**42.4**	5.59	412	**57.0**	7.23	373	**4078.3**	585.08	407	**34.7**	4.67	415	**53.0**	7.68	413	**310.1**	35.88
73kg	420	**169.7**	4.75	420	**70.8**	2.17	420	**21.2**	5.21	420	**55.8**	3.75	410	**129.1**	20.25	416	**46.1**	6.33	415	**44.4**	6.20	414	**56.8**	7.75	376	**4235.4**	587.69	410	**34.4**	4.74	417	**52.4**	8.36	416	**312.5**	38.51
81kg	414	**170.8**	5.31	414	**78.7**	2.36	414	**25.3**	6.60	414	**58.8**	5.06	411	**130.0**	21.26	414	**47.3**	7.09	413	**45.4**	6.78	409	**53.9**	7.77	374	**4410.3**	623.41	404	**33.2**	5.11	411	**52.7**	8.92	414	**320.2**	40.96
90kg	398	**171.7**	5.02	398	**87.7**	2.47	398	**30.4**	8.18	398	**61.0**	7.11	393	**135.8**	23.81	395	**48.5**	7.00	396	**46.5**	6.99	389	**51.4**	8.01	363	**4401.0**	628.19	386	**32.1**	4.93	394	**52.0**	8.31	393	**328.8**	38.21
90kg超	391	**173.9**	5.40	391	**110.8**	13.17	386	**40.1**	11.58	386	**65.7**	12.58	384	**139.6**	24.84	385	**51.2**	7.25	390	**48.8**	7.13	380	**45.9**	7.43	353	**4496.9**	701.34	378	**28.8**	4.77	388	**49.3**	9.74	386	**341.5**	39.35

※ 測定項目ごとに測定者数に相違があるが，怪我等の理由で実施していないためである。

表2 女子階級別における各測定項目の平均値及び標準偏差

【女子階級】	身長(cm)			体重(kg)			体脂肪率(%)			除脂肪体重(kg)			背筋力(kg)			握力[右](kg)			握力[左](kg)			垂直跳(cm)			肺活量(cc)			上体起こし(回)			長座体前屈(cm)			全身反応時間(msec		
	人数	平均値	標準偏差	人数	平均値	標準偏差	人数	平均値	標準偏差	人数	平均値	標準偏差	人数	平均値	標準偏差	人数	平均値	標準偏差	人数	平均値	標準偏差	人数	平均値	標準偏差	人数	平均値	標準偏差	人数	平均値	標準偏差	人数	平均値	標準偏差	人数	平均値	標準偏差
44kg	422	**151.4**	4.18	422	**43.4**	1.80	422	**20.2**	2.71	422	**34.7**	1.52	415	**69.9**	13.51	419	**26.8**	4.21	416	**25.2**	3.99	419	**41.2**	5.98	380	**2618.9**	467.86	419	**30.7**	4.58	422	**47.6**	6.83	421	**323.4**	41.96
48kg	419	**154.3**	4.14	419	**47.8**	1.34	419	**22.4**	2.89	419	**37.1**	1.55	415	**76.9**	15.30	418	**29.7**	4.19	417	**27.2**	4.11	417	**42.0**	6.47	378	**2799.8**	564.35	416	**30.6**	4.80	416	**49.6**	7.31	418	**324.6**	42.24
52kg	432	**156.2**	4.34	432	**51.4**	1.36	432	**24.2**	2.99	432	**39.0**	1.73	427	**79.6**	16.60	426	**30.1**	4.55	431	**28.5**	4.15	427	**42.1**	6.10	393	**2892.7**	535.69	427	**30.5**	4.77	427	**50.4**	7.34	431	**325.5**	40.16
57kg	424	**158.6**	4.36	424	**55.8**	1.61	424	**26.5**	3.52	424	**41.0**	2.11	417	**85.1**	17.55	422	**31.4**	4.45	420	**30.1**	4.32	413	**41.2**	6.24	378	**3045.7**	546.23	415	**31.0**	4.68	422	**52.1**	7.65	419	**328.1**	42.32
63kg	430	**159.7**	4.53	430	**60.9**	2.04	430	**29.4**	3.78	430	**43.0**	2.38	421	**87.0**	18.68	426	**32.7**	4.85	426	**31.1**	4.64	421	**41.1**	6.42	383	**3182.1**	482.95	422	**29.2**	4.57	426	**51.5**	7.73	427	**333.1**	40.75
70kg	417	**160.7**	4.89	417	**67.4**	2.27	417	**33.8**	5.21	417	**44.6**	3.41	411	**87.3**	18.26	412	**33.7**	4.99	416	**32.0**	4.66	413	**39.9**	6.71	372	**3192.8**	626.00	409	**29.2**	4.57	416	**50.2**	7.92	415	**341.3**	44.74
70kg超	404	**162.4**	4.95	404	**86.1**	12.56	401	**44.5**	8.81	401	**46.9**	6.10	397	**90.4**	20.72	398	**36.1**	5.89	402	**34.1**	5.76	393	**36.7**	6.17	361	**3341.3**	595.64	393	**26.3**	4.98	402	**48.2**	8.01	398	**360.7**	44.94

※ 測定項目ごとに測定者数に相違があるが，怪我等の理由で実施していないためである。

表3 男子階級及び各測定項目における多重比較一覧

階級/項目	身 長 (cm)	体 重 (kg)	体脂肪率 (%)	除脂肪体重 (kg)	背筋力 (kg)	握力[右] (kg)	握力[左] (kg)	垂直跳 (cm)	肺活量 (cc)	上体起こし (回)	長座体前屈 (cm)	全身反応時間(msec)
55kg級	全階級	全階級	全階級	全階級	全階級	全階級	全階級	81kg, 90kg, 90kg超	全階級	81kg, 90kg, 90kg超	66kg, 73kg, 81kg	81kg, 90kg, 90kg超
60kg級	全階級	全階級	全階級	全階級	全階級	全階級	全階級	81kg, 90kg, 90kg超	全階級	73kg, 81kg, 90kg, 90kg超	90kg超	81kg, 90kg, 90kg超
66kg級	全階級	全階級	全階級	全階級	55kg, 60kg, 81kg, 90kg, 90kg超	全階級	全階級	81kg, 90kg, 90kg超	55kg, 60kg, 81kg, 90kg, 90kg超	81kg, 90kg, 90kg超	55kg, 90kg超	81kg, 90kg, 90kg超
73kg級	55kg, 60kg, 66kg, 90kg, 90kg超	全階級	全階級	全階級	55kg, 60kg, 90kg, 90kg超	55kg, 60kg, 66kg, 90kg, 90kg超	55kg, 60kg, 66kg, 90kg, 90kg超	81kg, 90kg, 90kg超	55kg, 60kg, 81kg, 90kg, 90kg超	60kg, 90kg, 90kg超	55kg, 90kg超	90kg, 90kg超
81kg級	55kg, 60kg, 66kg, 90kg超	全階級	全階級	全階級	55kg, 60kg, 66kg, 90kg, 90kg超	55kg, 60kg, 66kg, 90kg超	55kg, 60kg, 66kg, 90kg超	全階級	55kg, 60kg, 66kg, 73kg	55kg, 60kg, 66kg, 90kg超	55kg, 90kg超	55kg, 60kg, 66kg, 90kg超
90kg級	55kg, 60kg, 66kg, 73kg, 90kg超	全階級	全階級	全階級	55kg, 60kg, 66kg, 73kg, 81kg	55kg, 60kg, 66kg, 73kg, 90kg超	55kg, 60kg, 66kg, 73kg, 90kg超	全階級	55kg, 60kg, 66kg, 73kg,	55kg, 60kg, 66kg, 73kg, 90kg超	90kg超	55kg, 60kg, 66kg, 73kg, 90kg超
90kg超級	全階級	全階級	全階級	全階級	55kg, 60kg, 66kg, 73kg, 81kg	全階級	全階級	全階級	55kg, 60kg, 66kg, 73kg,	全階級	60kg, 66kg, 73kg, 81kg, 90kg	全階級

表4 女子階級及び測定項目における多重比較一覧

階級/項目	身 長 (cm)	体 重 (kg)	体脂肪率 (%)	除脂肪体重 (kg)	背筋力 (kg)	握力[右] (kg)	握力[左] (kg)	垂直跳 (cm)	肺活量 (cc)	上体起こし (回)	長座体前屈 (cm)	全身反応時間(msec)
44kg級	全階級	全階級	全階級	全階級	全階級	全階級	全階級	70kg超	全階級	70kg, 70kg超	48kg, 52kg, 57kg, 63kg, 70kg	70kg, 70kg超
48kg級	全階級	全階級	全階級	全階級	44kg, 57kg, 63kg, 70kg, 70kg超	全階級	全階級	70kg, 70kg超	44kg, 57kg, 63kg, 70kg, 70kg超	70kg, 70kg超	44kg, 57kg, 63kg	70kg, 70kg超
52kg級	全階級	全階級	全階級	全階級	44kg, 57kg, 63kg, 70kg, 70kg超	全階級	全階級	70kg, 70kg超	44kg, 57kg, 63kg, 70kg, 70kg超	70kg, 70kg超	44kg, 70kg超	70kg, 70kg超
57kg級	全階級	全階級	全階級	全階級	44kg, 48kg, 52kg, 70kg超	全階級	44kg, 48kg, 52kg, 70kg, 70kg超	70kg超	44kg, 48kg, 52kg, 70kg, 70kg超	70kg, 70kg超	44kg, 48kg, 70kg, 70kg超	70kg, 70kg超
63kg級	44kg, 48kg, 52kg, 57kg, 70kg超	全階級	全階級	全階級	44kg, 48kg, 52kg	44kg, 48kg, 52kg, 57kg, 70kg超	44kg, 48kg, 52kg, 70kg超	70kg超	44kg, 48kg, 52kg, 70kg超	70kg超	44kg, 48kg, 70kg超	70kg超
70kg級	44kg, 48kg, 52kg, 57kg, 70kg超	全階級	全階級	全階級	44kg, 48kg, 52kg	44kg, 48kg, 52kg, 57kg, 70kg超	44kg, 48kg, 52kg, 57kg, 70kg超	70kg超	44kg, 48kg, 52kg, 57kg, 70kg超	44kg, 48kg, 52kg, 57kg, 70kg超	44kg, 57kg, 70kg超	44kg, 48kg, 52kg, 57kg, 70kg超
70kg超級	全階級	全階級	全階級	全階級	44kg, 48kg, 52kg, 57kg	全階級	全階級	全階級	全階級	全階級	52kg, 57kg, 63kg, 70kg	全階級

引用・参考文献

1）廣瀬伸良他：中学校柔道一流選手の基礎的体力－機能指数による比較－，武道学研究第23巻，第２号，pp.107-108，1990.

2）射手矢　岬他：一流中学選手の形態及び機能特性，競技種目別競技力向上に関する研究，第23報，pp.89-97，1999.

3）柔道選手育成研究会編：ジュニア選手育成のための柔道コーチング論，道和書院，pp115-136，2008.

4）村松成司他：中学校柔道一流選手の基礎的体力について－競技成績による比較－，競技種目別競技力向上に関する研究，第13報，pp.159-166，1989.

5）村山晴夫他：全国中学校柔道大会出場選手の体力について　－2000年～2002年の体力測定結果から－，柔道科学研究，第９号，pp.20-29，2004.

6）中野雅之他：大学柔道選手の階級別による体力構造，武道学研究第23巻，第２号，pp.3-4，1990.

7）西林賢武他：全国中学校柔道大会参加選手の基礎的体力－競技成績による比較－，武道学研究第22号第２号，pp.169-170，1989.

8）西林賢武他：中学校柔道一流選手の基礎的体力について－機能指数による比較－，競技種目別競技力向上に関する研究，第14報，pp.187-193，1990.

9）西林賢武他：中学校柔道一流選手の基礎的体力－形態指数による比較－，武道学研究第23巻，第２号，pp.105-106，1990.

10）尾形敬史：中学校柔道選手の体格・体力について，柔道，56-12，pp.58-63，1985.

11）高橋邦郎他：中学柔道選手の体格・体力，武道学研究，15-2，pp.101-103，1982.

12）全日本柔道連盟強化委員会科学研究部：平成12年度全国中学校柔道大会 体力測定結果報告書（男子），2000.

13）全日本柔道連盟強化委員会科学研究部：平成12年度全国中学校柔道大会 体力測定結果報告書（女子），2000.

14）全日本柔道連盟強化委員会科学研究部：平成13年度全国中学校柔道大会 体力測定結果報告書，2001.

15）全日本柔道連盟強化委員会科学研究部：平成14年度全国中学校柔道大会 体力測定結果報告書，2002.

16）全日本柔道連盟強化委員会科学研究部：平成15年度全国中学校柔道大会 体力測定結果報告書，2003.

17）全日本柔道連盟強化委員会科学研究部：平成16年度全国中学校柔道大会 体力測定結果報告書，2004.

18）全日本柔道連盟強化委員会科学研究部：平成17年度全国中学校柔道大会 体力測定結果報告書，2005.

19）全日本柔道連盟強化委員会科学研究部：平成18年度全国中学校柔道大会 体力測定結果報告書，2006.

20）全日本柔道連盟強化委員会科学研究部：平成19年度全国中学校柔道大会 体力測定結果報告書，2007.

21）全日本柔道連盟強化委員会科学研究部：平成20年度全国中学校柔道大会 体力測定結果報告書，2008.

22）全日本柔道連盟強化委員会情報戦略部：平成21年度全国中学校柔道大会 体力測定結果報告書，2009.

柔道科学研究 , 15, 9-12 (2010)

2007年世界柔道選手権大会における外国人選手の競技傾向

石川美久 [1)]、佐藤伸一郎 [2)]、村山晴夫 [3)]、坂本道人 [4)]、横山喬之 [5)]、
西田孝宏 [6)]、金丸雄介 [7)]、中西英敏 [8)]、小嶋新太 [9)]

Analysis of foreign players on World Judo Championships in 2007

Yoshihisa ISHIKAWA, Shinichiro SATO, Haruo MURAYAMA, Michito SAKAMOTO,
and Takayuki YOKOYAMA, Takahiro NISHIDA, Yusuke KANAMARU, Hidetoshi NAKANISHI
and Arata KOJIMA

Abstract

The purpose of this study is to clarify foreign player's trend in game of attacking and how to fold by comparing with Rio de Janeiro World Judo Championships in 2007 and Cairo World Judo Championships in 2005.

AS a result, followings are found in this research:

1) Kuchikitaoshi and Kataguruma have decreased in men in Rio de Janeiro World Judo Championships. However, Kuchikitaoshi and Kataguruma account for a substantial fraction of techniques, in other word, very characteristic techniques.
   In addition, Seoinage and Morotegari have increased in both men and women, on the other hand, Uchimata has decreased in Rio de Janeiro World Judo Championships.
2) Nage-waza and Te-waza have decreased, and also, Masutemi-waza and Yokosutemi-waza have increased in Rio de Janeiro World Judo Championships. Trend of attacking, bending their body down, has been continuing to increase especially in foreign players of men.
3) Folding by both hands has decreased and folding by single-handed and not gripping have increased in both men and women.

As mentioned above, there are changes in attacking and how to fold each other of Nage-waza. As a result, it became clear that trend of foreign players has been changing constantly regardless of no revision in rules.

key word : World Judo Championships, foreign players, attacking, how to hold

Ⅰ　緒言

世界の柔道競技は、これまで高い競技力を示す国が限られていた。近年は、中央アジア、南米地域にも強豪国が台頭している。すでに外国人選手について大陸別、国別に特徴を分類した報告がされている[9)]。しかし、近年台頭してきている国の選手の柔道スタイルは、選手特有の組み方や施技傾向を持ち、従来の分類で括ることができない。

そこで本研究は、2007年世界柔道選手権大会（以下、「世界選手権」と略す）における外国人選手の施技や組み方の競技傾向を明らかにすることを目的とする。2007年リオデジャネイロで開催された世界選手権は、北京五輪の前年の注目される大会であり、その前哨戦といえる大会でもある。

Ⅱ　方法

1. 対象

対象とした大会は、2007年リオデジャネイロ世界柔道選手権大会（以下、「リオ大会」と略す）である。試合数は933試合である。これと前回の大会である2005年カイロ世界柔道選手権大会（以下、「カイロ大会」と略す）741試合との比較を行った。

試合映像は、全日本柔道連盟強化委員会科学研究部（現在、情報戦略部）が会場で撮影したものを用いた。

1）筑波大学　2）拓殖大学　3）獨協医科大学　4）福岡大学　5）筑波大学研究生　6）山梨学院大学
7）了徳寺学園　8）東海大学　9）日本体育大学

さらに、正確さを期すため、試合者が得点を取得した投技のみ、 IJF公式記録を参照した。

施技の映像は、試合者全ての動作が撮影されているものを対象とした。分析施技については、投げる意思を持って掛けたと思われる投技全てとし、偽装的な攻撃として、「指導」の罰則を宣告されたときの施技は除いた。また、公式記録の技名称が明らかに異なる場合は、筆者が訂正した。

2．分析項目

分析項目は、投技の名称、投技の分類、得点、組み方である。投技の名称は、66本の技をそれぞれの技ごとに分けて検討した。投技の分類は、手技、腰技、足技、真捨身技、横捨身技の5種類について検討した。得点は、「一本」「技あり」「有効」「効果」について、試合者が獲得した得点を検討した。組み方は、施技直前のものとし、両手で柔道衣を握っている場合（以下、「両手組み」と略す）と、片手で柔道衣を握っている場合（以下、「片手組み」と略す）と、両手で柔道衣を握っていない場合（以下、「握っていない」と略す）の3種類に分けて検討した。

3．統計処理

投技の名称、投技の分類、得点、組み方の各分析項目について、クロス表を用いて、χ^2検定を行った。統計学的有意水準は5％未満とし、有意差が認められた場合、さらに残差分析を行った。

Ⅲ　結果および考察

1．投技の名称

国際柔道連盟が定める投技は66本である。全施技をこれらの技ごとに分けた。施技の頻度によって、リオ大会における上位10位までの投技の名称を男子は表1、女子は表2に示した。男子において、リオ大会で増加した技は、隅返、背負投、小内刈、双手刈であった。また、減少した技は、朽木倒、内股、肩車、巴投であった。さらに、男子の施技頻度の上位5位を順にみると、カイロ大会では、内股、朽木倒、肩車、隅返、一本背負投であった。リオ大会では、隅返、朽木倒、内股、背負投、一本背負投であり、両大会ともに同様な技が上位にみられた。

女子において、リオ大会で増加した技は、背負投、大内刈、袖釣込腰であった。減少した技は、内股、一本背負投であった。続いて、女子の施技数の上位5位を順にみると、カイロ大会では内股、一本背負投、朽木倒、大内刈、払巻込であった。リオ大会では内股、一本背負投、背負投、大内刈、朽木倒であり、女子においても、両大会ともに同様の施技が上位にみられた。

男子にみられる朽木倒と肩車は、本来の形では分類が異なるが、実戦場面での施技では融合されているため、同系統の技であると報告されている[2、3、7]。また、肩車は、浮技との連絡技としても解説されている[1]。さらに、肩車と浮技は映像からも類似していることが確認され、同系等の技としてみることができる。これらを同系等の技とすると、男子では、カイロ大会21.2％、リオ大会19.4％であった。女子においては、カイロ大会12.6％、リオ大会13.2％であった。すなわち女子においてこれらの技は、男子に比べ施技されていないことがわかる。これらの技は、相手の懐に潜り込み担ぎあげる、または密着して制して投げる技であり、力を使う技である。外国人選手は、脚取や捨身系の技が特徴的であることが指摘されているが、これは体格的に筋力の強い男子においてあてはまると推察される。

男女ともに変化のあった技についてみると、リオ大会で、男女ともに内股が減少した。内股は、片足で上体を支え、もう一方の足を相手の股に入れて投げる技である。よって、内股は、比較的不安定な上体になりやすく、朽木倒、肩車などによって相手に脚を取られるなど、返し技のリスクが高い技といえる。これまでに外国人選手が、試合で相手の内股を掬投として返す場面が報告されている[6]。本研究では、直接相手の脚を取る肩車、掬投、朽木倒が減少したことから、内股の変化に着目したがリオ大会では減少した。石川らは、男女ともに内股が減少しており、その中で朽木倒、肩車、掬投といった直接脚を取る技が増加したことが内股を減少させた要因と指摘している[2]。しかし、本研究では、直接脚を取る技が減少したにもかかわらず、内股が減少した。その理

表1　投技の名称（男子）

	カイロ大会			リオ大会		
技名称	頻度	%		頻度	%	
隅返	243	6.8	−	439	9.8	+
朽木倒	394	11	+	424	9.5	−
内股	429	12	+	404	9	−
背負投	216	6	−	326	7.3	+
一本背負投	239	6.7		317	7.1	
肩車	284	8	+	276	6.2	−
小内刈	127	3.6	−	260	5.8	+
巴投	230	6.4	+	228	5.1	−
大内刈	159	4.5		215	4.8	
双手刈	103	2.9	−	191	4.3	+
合　計	2424	67.9		3080	68.9	

+：5%で有意に大，　−：5%水準で有意に小

表2 投技の名称(女子)

	カイロ大会			リオ大会		
技名称	頻度	%		頻度	%	
内股	299	13.3	+	372	11.4	−
一本背負投	249	11.1	+	297	9.1	−
背負投	60	2.7	−	275	8.5	+
大内刈	153	6.8	−	272	8.4	+
朽木倒	162	7.2		249	7.7	
払巻込	148	6.6		191	5.9	
小内刈	100	4.4		162	5	
肩車	96	4.3		161	4.9	
大外刈	111	4.9		141	4.3	
袖釣込腰	62	2.8	−	139	4.3	+
合 計	1440	64.1		2259	69.5	

+:5%で有意に大, −:5%水準で有意に小

由は、内股は、脚を取られるリスクが高いため、選手が施技を避けていると考えられる。

2. 投技の分類

投技全てを手技、腰技、足技、真捨身技、横捨身技の５種類に分けて検討した。

投技の分類を男子は表３、女子は表４に示した。男子においては、リオ大会で手技が減少し、真捨身技、横捨身技が増加した。女子においては、リオ大会で手技が増加し、腰技が減少した。

これまでに、手技や真捨身技は、近年の国際大会で増加傾向にあることが報告されている[2,3,5]。しかし、本研究では、男子において、手技がリオ大会で減少し、真捨身技が増加した。つまり、体を捨てながら施技する傾向は継続されているといえる。映像からは、外国人選手が返し技のリスクを抑えるためや偽装的攻撃の罰則を受けないように、体を捨てながら施技していることが確認できた。

表3 投技の分類(男子)

	カイロ大会			リオ大会		
技種類	頻度	%		頻度	%	
手技	1563	43.8	+	1821	40.7	−
腰技	230	6.4		267	6.0	
足技	1027	28.8		1297	29.0	
真捨身技	501	14.0	−	718	16.0	+
横捨身技	250	7.0	−	370	8.3	+
合 計	3571	100		4473	100	

+:5%で有意に大, −:5%水準で有意に小

表4 投技の分類(女子)

	カイロ大会			リオ大会		
技種類	頻度	%		頻度	%	
手技	760	33.8	−	1271	39.1	+
腰技	284	12.6	+	272	8.4	−
足技	872	38.8		1198	36.8	
真捨身技	108	4.8		185	5.7	
横捨身技	224	10		327	10.0	
合 計	2248	100		3253	100	

+:5%で有意に大, −:5%水準で有意に小

女子においては、手技が増加し、腰技が減少した。手技には、離れた状態や組み際に施技しやすい技があり、それらが増加の要因の一つと考えられる。腰技は両手で組み合わなければ施技することが難しい技が多いが、一定の傾向がみられなかった。

3. 得点

柔道の得点は、優位性の順に「一本」「技あり」「有効」「効果」の４つに分類されている。本研究では、上記以外を「得点なし」として、それぞれの得点について２大会の比較検討を行った。

得点の比較を男子は表５、女子は表６に示した。男子においては、リオ大会で「技あり」が減少した。女子においては、リオ大会で「一本」「効果」が減少した。さらに、男女ともに、リオ大会で「得点なし」が増加した。国際柔道連盟は「一本」を目的とする“ダイナミック柔道”を推奨している。しかし、リオ大会の男子では「一本」に変化はなかったが、女子では「一本」に減少がみられた。

表5 得点(男子)

	カイロ大会			リオ大会		
得点	頻度	%		頻度	%	
一本	185	5.2		253	5.7	
技あり	141	3.9	+	135	3	−
有効	199	5.6		211	4.7	
効果	90	2.5		89	2	
得点なし	2956	82.8	−	3785	84.6	+
合 計	3571	100		4473	100	

+:5%で有意に大, −:5%水準で有意に小

表6 得点(女子)

	カイロ大会			リオ大会		
得点	頻度	%		頻度	%	
一本	105	4.7	+	103	3.2	−
技あり	61	2.7		90	2.8	
有効	110	4.9		173	5.3	
効果	97	4.3	+	75	2.3	−
得点なし	1875	83.4	−	2812	86.4	+
合 計	2248	100		3253	100	

+:5%で有意に大, −:5%水準で有意に小

4. 組み方

柔道の組み方は、「標準的」組み方として国際柔道連盟試合審判規定に定められている[8]。しかし、外国人選手は、両手で柔道衣を握らず、「片手組み」の状態で組むことが指摘されている[4]。そこで、外国人選手の施技直前の組み方を明らかにするために「両手組み」「片手組み」「握っていない」の３種類に分けて検討した。

組み方の比較を男子は表７、女子は表８に示した。男

女ともにリオ大会で、「両手組み」が減少し、「片手組み」「握っていない」が増加した。

外国人選手は、男子のみ両手で組み合わない傾向にあると報告されている[2)]。本研究では、女子においても組み合わない傾向が明らかとなった。この要因の一つとして、比較的離れたところから施技が可能な双手刈や袖釣込腰の増加が“組み合わない”傾向に影響していると考えられる。さらに、高レベルの試合では、選手の攻撃防御の技術が優れており、組み方が勝敗に影響する。選手は、互いに有利な組み方になろうとし、組み手争いが厳しくなる[2)]。したがって、この組み手争いが激しくなることで組み際や不十分の状態からの施技が増加し、組み合わない傾向になると推察される。

表7 組み方(男子)

	カイロ大会			リオ大会		
組み方	頻度	%		頻度	%	
両手組み	2221	62.2	+	2348	52.5	−
片手組み	1145	32.1	−	1742	38.9	+
握っていない	205	5.7	−	383	8.6	+
合 計	3571	100		4473	100	

+:5%で有意に大, −:5%水準で有意に小

表8 組み方(女子)

	カイロ大会			リオ大会		
組み方	頻度	%		頻度	%	
両手組み	1460	64.9	+	1953	60.0	−
片手組み	661	29.4	−	1062	32.7	+
握っていない	127	5.7	−	238	7.3	+
合 計	2248	100		3253	100	

+:5%で有意に大, −:5%水準で有意に小

Ⅳ 結論

本研究は、2007年世界選手権を対象に2005年世界選手権との比較を行い、外国人選手の施技や組み方の競技傾向を明らかにすることを目的とした。そして、以下のことが明らかとなった。

1) 投技の名称において、リオ大会の男子は朽木倒、肩車が減少した。しかし、これらの技は全体的には大きな割合を占めており、特徴的な技であるといえる。さらに、男女ともにリオ大会で背負投が増加し、内股が減少した。
2) 投技の分類において、リオ大会の男子は手技が減少し、真捨身技、横捨身技が増加した。女子では、手技が増加し、腰技が減少した。特に男子においては、体を捨てながら施技する傾向が増加している。
3) 得点において、リオ大会の男子は「技あり」が、女子は「一本」が減少した。
4) 組み方においては、男女ともに、「両手組み」が減少し、「片手組み」「握っていない」が増加した。外国人選手の組み合わない傾向は、男女ともにいえることであり、この傾向は継続していることが示唆された。

カイロ大会からリオ大会の期間、主なルール改正はなく、五輪前ということから同じような選手たちで競われていると考えられる。しかし、投技施技や得点、施技直前の組み方に変化がみられた。つまり、外国人選手の傾向は、ルール改正に関係なく常に変化していることが示唆された。

文献

1) 醍醐敏郎:講道館柔道・投技 下-真捨身技・横捨身技.本の友社,東京,1999.
2) 石川美久他:世界柔道選手権大会における外国人選手の競技傾向−1995年と2005年の比較−.柔道科学研究,14,14-19,2009.
3) 中村 勇他:1995〜1999年世界柔道選手権大会の競技内容分析:勝利ポイントと勝利ポイント獲得技による比較.武道学研究,35(1),15-23,2002.
4) 中村 勇他:1995年から1999年までの世界柔道選手権大会のポイント獲得傾向−性別と階級別の比較−.講道館柔道科学研究会紀要,9,147-156,2002.
5) 中村 勇他:2003年世界選手権の競技分析−1995年〜2001年大会との比較−.柔道科学研究,9,1-6,2004.
6) 野瀬清喜:ユニバーシアード大会柔道競技.柔道,72(11),25,2001.
7) 菅波盛雄他:日本人男子柔道選手の欧州大会における敗退要因について.武道学研究,34(2),13-21,2001.
8) 財団法人全日本柔道連盟:国際柔道連盟試合審判規定.東京,共立速記印刷株式会社,2004.
9) 全日本柔道連盟強化委員会科学研究部:各国柔道の特徴.柔道の競技力向上に関する研究,142-148,1988.

柔道科学研究 , 15, 13-18 (2010)

国際大会の日本人選手の試合展開について

射手矢　岬 [1)]、谷口一真 [2)]、佐藤伸一郎 [3)]、山本洋祐 [4)]、
正木嘉美 [5)]、岡田弘隆 [6)]、篠原信一 [5)]、園田隆二 [7)]

About Match Development and Outcome in JUDO

Misaki ITEYA, Kazuma TANIGUCHI, Sinichiro SATO, Yosuke YAMAMOTO
Yoshimi MASAKI, Hirotaka OKADA, Shinichi SHINOHARA, Ryuji SONODA

The purpose of this study is to clarify the characteristic of “dominant rate”, and the relation between match development and outcome. The dominant time and the dominant rate in each match were measured using image analysis software for 69 men’s matches and 93 women’s matches of Japanese athletes who had participated in the 2008 Beijing Olympics, the 2009 Rotterdam World Championships, and the 2009 Hamburg Grand Prix. When one athlete was advancing in a match against an opponent, the athlete was defined to be “dominating”, and the dominant time per match time was defined to be the “dominant rate”. The dominant rate of each match was calculated, the athlete who held the higher dominant rate was defined to be “Superior”, and the athlete who held the lower dominant rate was defined to be “Inferior”. The relationship between the superiority or inferiority of the dominant rate and the outcome of the match was classified, “victory-superior”, “victory-inferior”, “defeat-superior”, “defeat-inferior”, and it was classified by gender. In conclusion, in the Japanese victory match, there were a lot of superior match developments in both the men’s and women’s draws. On the other hand, in the matches where Japanese were defeated, there were a lot of inferior match developments in both men’s and women’s draws. When the matches in which the Japanese were defeated are examined, the ratio of women’s matches in which they were superior was greater than the matches in which men were superior. Furthermore, when the matches in which the Japanese were victorious are examined, the ratio of men’s matches in which they were inferior was greater than the women’s matches in which they were inferior.

1. はじめに

シドニーでは金メダル４個、アテネでは８個の金メダルを獲得した。しかし、北京オリンピックでは男女合わせて金メダル３個、2009年オランダ・ロッテルダムで開催された世界選手権大会では女子の金メダルは３個だったものの、男子は史上初のゼロに終わってしまった。特に男子において、外国人に対して勝つことが難しくなってきているというのが現状である。

これまで、柔道の試合を分析した研究は数多くある。村山ら（2005年）は、2001年世界選手権女子57キロ級優勝・ルペティ（キューバ）の映像を分析した。その結果、得意技、組み手のパターン、連絡技のパターン、施技の回数・頻度、相手が与えられる反則の種類が分かり、映像分析が多様かつ発展的に検討されていくことは、柔道競技における強者像の明確化などを可能にするであろう、と述べている。石川ら（2009年）の研究では、世界選手権大会における外国人選手の組み方と施技について技術的特徴の変化を調査した結果、真捨身技や体を捨てるといった技が増加し、「片手組み」「握っていない」状態からの施技が増加、組み合うことが減少している、と報告している。

これまでの先行研究の中で、柔道における試合展開、すなわち組み手の優勢や試合の流れに着目した研究はない。日本人選手の敗因の一つとしてパワー不足、体力不足という声が今でもあがっているが、実際の試合中ではパワーで押され不利な状況（劣勢）が多いのではないかと考えられる。つまり、外国人選手に日本人選手が試合の流れにおいて支配されているのではないか、という

1）東京学芸大学　2）東京学芸大学大学院修士課程　3）拓殖大学　4）日本体育大学　5）天理大学
6）筑波大学　7）警視庁

ことである。

そこで、本研究では最近の国際大会の日本人対外国人の試合を集め、日本人が試合を優勢に進めている割合と劣勢な割合を調べ、それらを試合展開の支配率というパラメータにして、勝敗との関係をみることにした。

2．研究方法

1）対象

2008年北京オリンピック、2009年ロッテルダム世界選手権、グランプリハンブルグ2009に出場した日本人選手の試合男子69試合、女子93試合（日本人選手同士の試合、棄権勝ちを除いたもの）。

2）測定方法

各試合におけて日本選手と外国人選手のそれぞれの優勢な状況の割合を算出するために支配時間を計測した。時間の計測には、GameBreaker（フィットネスアポロ社製品）という映像分析ソフトを用いた。「支配時間」とは、試合中に一方の選手が他の選手に対して優勢に試合を運んでいる場合を支配している状態とみなし、その時間を計測し、全体の試合時間から支配率を求めた。支配している状態を以下のように定義した。

立ち技に関して優勢な状況は以下のアとイの通りとした。

ア. 組み手の優勢について

- 自分は十分な組み手（技に入ることが出来る状態）で、相手はその状態でないとき。
- 相手が頭を下げる、もしくは自分が頭を下げさせたとき。
- 相手を動かそうとする動作（引きずる、煽る）をしたとき。
- 自分の動作で（技には直接つながらない場合でも）相手が反応したとき。
- 相手を動かして、その動作が技につながるとき。

イ. 技の優勢について

- 技を掛けているときは掛けているほうが優勢。
- 「技を掛ける」とは、技に入る一歩目の足が動いてから相手を投げる、もしくは相手とともにつぶれるまでの時間。
- 組み際の技に関しては、組むところからとする。
- 組み際で奥や腰などを取りに行く、または捨て身技を掛ける場合、相手が大きく崩れたときのみ優勢とする。
- 掛け逃げに近い技の場合、相手の体が少しでも崩れたり、動いたりすれば優勢とする。
  しかし、次のような場合は相手方が支配している、もしくは無効（中間）とする。
- 背負投の場合、掛け逃げや明らかに入るだけのもの（低い背負投で相手の股に入っていない、相手を担いでいないなど）は無効とする。
- 足技は、相手が崩れる、動くもののみ優勢とする。技の威力が軽いもの、相手が崩れない、動かないもの、けん制のための足技は無効とする（ただし、足技から連絡技で他の技に入った場合、足技からの時間を優勢とする）。
- 技には入ったが相手に体を制されている場合は相手を優勢とする。
- 返し技を掛けられた場合は、相手が優勢。（掛けられるまでは最初に技に入ったほうが優勢、体が崩れ、返しの体勢になったら返すほうが優勢。）

次に、固め技に関して優勢な状況は以下通りとした。

- 固め技は抑え込んでいる状態と、攻めているほうが優勢とする。
- 相手がうつ伏せで自分が上の場合、固め技で攻めている様子が見られるとき。
- 自分が上になっていても、固め技で攻める様子が見られない場合は中間とする。
- どちらも攻めている、どちらも攻めていないといった攻守がはっきりしない場合は、中間とする。
- 相手がうつ伏せで自分が立っている状態のとき、引きずったり立たせようとしたりするものは優勢とする。この状態で動きが見られないものは中間とする。

3）分析方法

各試合の支配率を算出し、支配率が上回っているほうを「優勢」、下回ったほうを「劣勢」とした。また、試合の勝敗との関係で「優勢で勝ち」「優勢で負

け」「劣勢で勝ち」「劣勢で負け」というように4つに分類し、男女別に分けて全試合のそれぞれの割合を算出した。

支配率に関しては、立ち技で攻めている時間を「立ち技の支配」、寝技で攻めている時間を「寝技の支配」、どちらも試合を支配していない時間を「中間」、試合の時計が進んでいない状態を「待て」とし、(「立ち技」+「寝技」)／「試合時間」で支配率を求めた。

3. 結果と考察

1) 日本人が勝利した試合

日本人が勝った試合に関しては、外国人が有利な試合の割合よりも、日本人が有利な試合の割合のほうが男女とも多かった。特に女子の試合において、どの大会でも勝利試合の88.3%が日本人支配の試合であった。しかし、男子は勝利試合の75%が日本人支配の試合で、女子よりも低かった（図1）。すなわち、男子では試合は劣勢だったが勝利した、辛勝の割合が女子に比べ相対的に多かったという見方もできる。

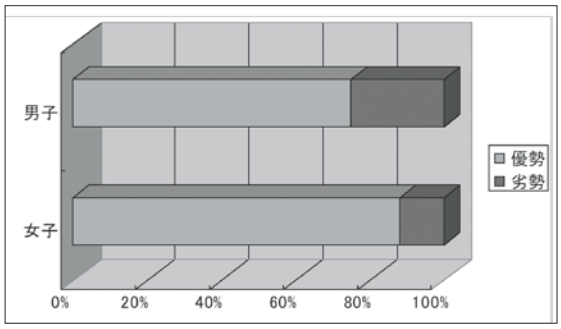

図1　日本人の勝利した試合の支配率（平均値）

2) 日本人が敗北した試合

日本人が負けた試合に関しては、男女とも外国人が有利な試合の割合が多かった。男子においては外国人支配の試合はどの大会でも８割を超えていた(平均84%)。それに比べ、女子は負けた試合でも31.3%の試合は日本人が支配していた（図2）。すなわち、女子は優勢に進めていたのに負けた惜敗の割合が男子よりも多かったと言える。

以上のことから、男女差に関しては、女子は試合において優勢な試合運びで勝利することが男子よりも多く、敗北した試合でも支配率は男子よりも高い

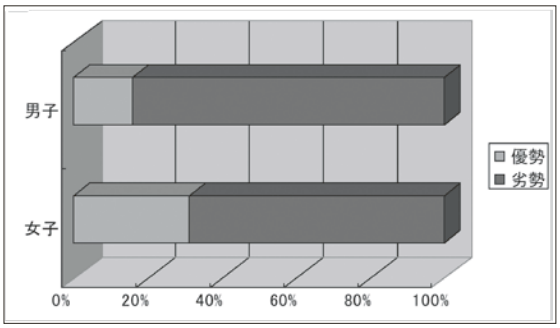

図2　日本人の敗北した試合の支配率（平均値）

という特徴がみられた。このことは女子の成績の好調と男子の成績の低迷を裏付ける要因とも考えられる。

3) 女子選手の勝ちパターンの典型例

2009年2月ハンブルグ・グランプリ大会と2009年9月ロッテルダム・世界選手権大会の両大会で優勝した女子の福見、中村、上野順恵選手の全試合の試合展開図を図３～５に示した。共通して言えることは、３選手共に各試合において立ち技と固め技の総合的な割合が高く、特に固め技における支配率が著しく高かった。女子に関して勝利に結びつくひとつのパターンは、固め技で試合を優勢に運ぶことであると考えられる。

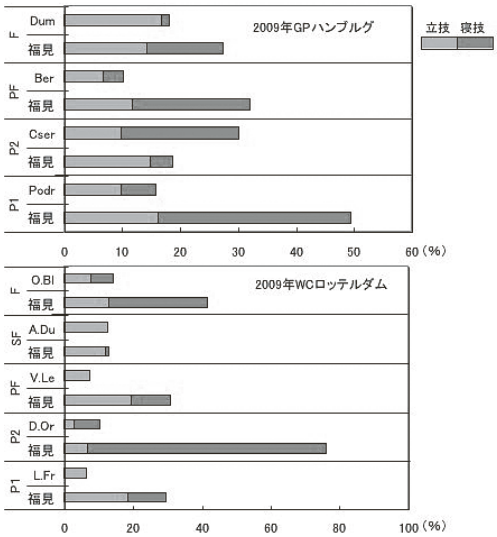

図3　福見選手の試合展開

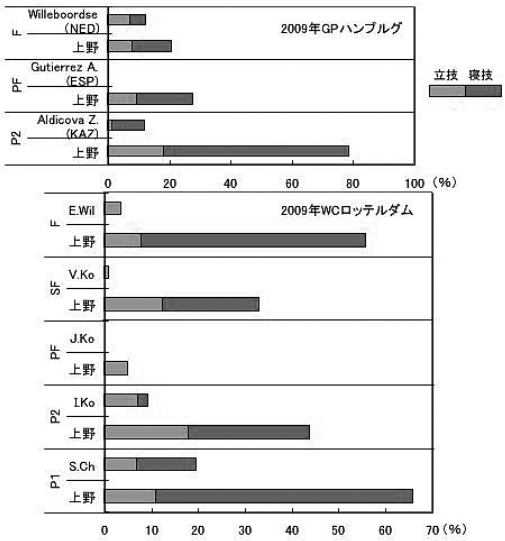

図4　上野選手の試合展開

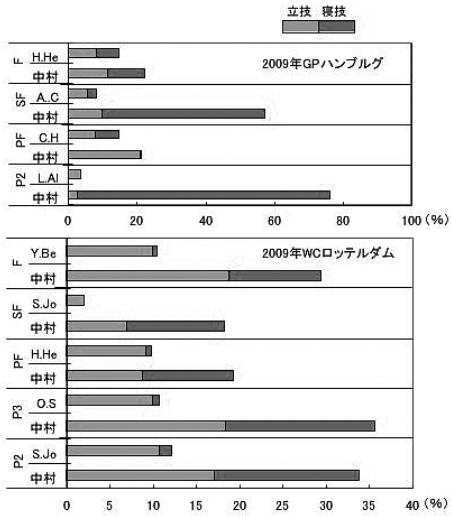

図5　中村選手の試合展開

4）各大会における日本人選手の負け試合の試合展開

３大会において日本人選手が負けた試合をすべて抜き出した。図６～７は2009年ハンブルグ・グランプリ大会、図８～９は2008年北京五輪大会、図10～11は2009年ロッテルダム世界選手権大会において日本人選手が負けた試合の支配率を示した。大部分の負け試合において外国人選手の支配率が高くなっている。しかし、中には日本人選手の支配率が高いのに負けているという場合が少数みられる。この場合についてのみ試合内容を以下に説明する。

ハンブルグ大会の中で図６の平岡選手の場合は、試合時間が31秒と短く、全体の施技回数も平岡

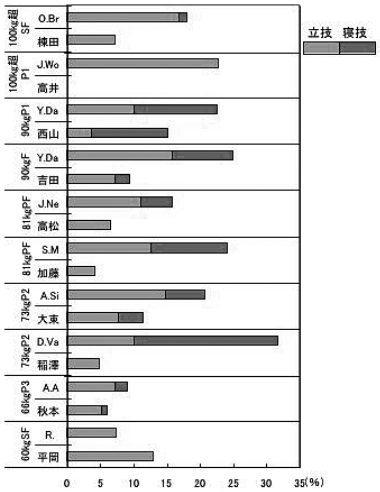

図6　2009年ハンブルグ・グランプリ大会の負け試合（男子選手）

選手が２回、相手が１回だった。その1回で一本負けしてしまったためであった。図７の西田選手の場合は、全体的に西田選手の方が試合を優位に進めていたが、残り２分半で相手の背負い投げをかわすために畳に着いた手を痛めてしまい、棄権したためこのような結果になった。

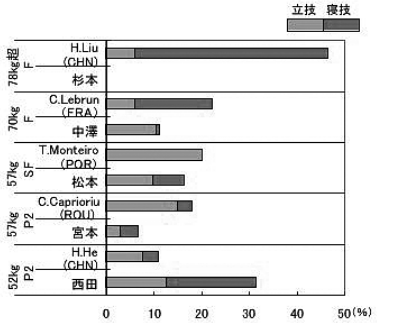

図7　2009年ハンブルグ・グランプリ大会の負け試合（女子選手）

北京五輪の試合の中で図８の鈴木選手の場合は、相手選手が足取りを得意としている選手で、足取りが失敗したときには鈴木選手が寝技で攻め込むという流れであった。全体では鈴木選手の方が支配率で勝っているが、1分26秒双手刈りで一本負けを喫してしまった。図９の佐藤選手の場合、２回戦は立技、寝技ともによく攻めていた。しかし、立技において、施技回数は多いものの、掛からずに入るだけの技が多かった。その結果、指導２で負けてしまうが、取られた反則は２つとも「掛け逃げ」によるものであった。敗者復活最終戦は、試合時間1分とあまり長い試合ではなかった。施技に関しても、相手

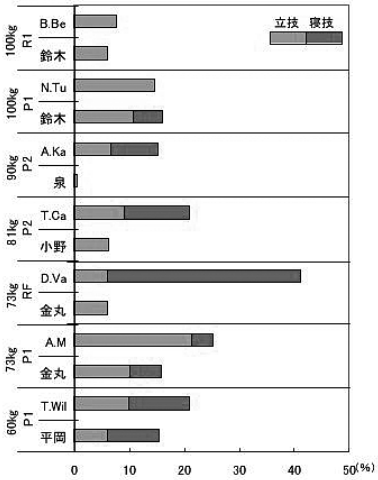

図8 2008年北京五輪大会の負け試合（男子選手）

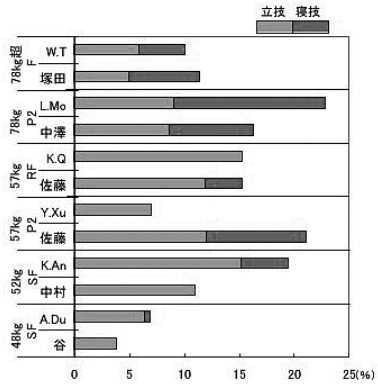

図9 2008年北京五輪大会の負け試合（女子選手）

が立技5回、佐藤選手が立技4回、寝技1回と支配率がほぼ変わらなかった。結果的には相手の払腰で一本負けを喫した。同じく図9の塚田選手は、ほぼ互角の試合をしていた。支配率をみると、立技では相手のほうが、寝技では塚田選手のほうが攻めていたことがわかる。全体でみると塚田選手のほうが攻めていた。相手選手が試合中に5回も帯を直すほど攻め込まれていたが、残り15秒で塚田選手が一本負けを喫してしまった。全体的には攻めていたが、最後の最後で一本を取られてしまったため、このような結果になった。

ロッテルダム世界選手権大会の中で図10の穴井選手の場合は、試合時間1分9秒と短い時間の試合であった。技を掛けた回数は穴井選手4回、相手選手3回と穴井選手の方が攻めていたが、技を掛けたところに返し技を合わせられてしまい、一本負けを喫してしまった。図11の中澤選手の場合は、両者と

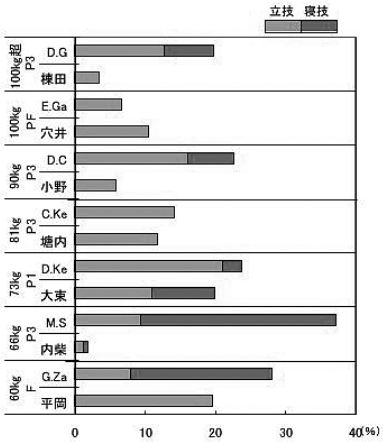

図10 2009年ロッテルダム世界選手権大会の負け試合（男子選手）

もに最初は同様に攻めていて、相手が技を仕掛けて潰れたところに中澤が寝技を仕掛けるといった場面がみられた。そのため中澤の寝技の支配率が高かった。試合時間残り1分間で、相手に攻め込まれてしまい、残り25秒で中澤に2つ目の「指導」が与えられた。

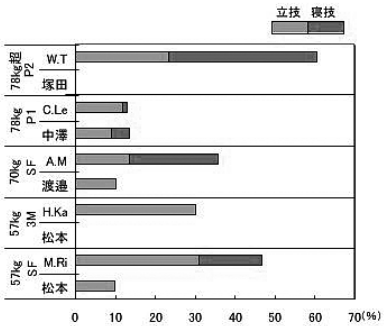

図11 2009年ロッテルダム世界選手権大会の負け試合（女子選手）

4. まとめ

本研究は最近の国際大会の日本人対外国人の試合を集め、日本人が試合を優勢に進めている割合と劣勢な割合を調べ、それらと勝敗との関係をみることが目的であった。各試合の支配率を算出し、支配率が上回っているほうを「優勢」、下回ったほうを「劣勢」とし、試合の勝敗との関係で「優勢で勝ち」「優勢で負け」「劣勢で勝ち」「劣勢で負け」というように4つに分類し、男女別に分けて全試合のそれぞれの割合を算出した。

日本人が勝った試合に関しては、日本人が有利な試合の割合のほうが男女とも多かった。特に女子の試合において、どの大会でも勝利試合の8割以上が日本人支配の試合であったが、男子は勝利試合の75%が日本

人支配の試合で、女子よりも低かった。

一方、日本人が負けた試合に関しては、男子は日本人支配の試合は、どの大会でも２割もなかった。それに比べ、女子は負けた試合でも約３割の試合は日本人が支配していた。

また、上位の選手は、立ち技だけでなく、寝技での支配率も高く、特に女子の福見、中村、上野順恵選手らはどの試合においても寝技における支配率が他の日本選手に比べ高かった。

【引用参考文献】

廣瀬伸良他：柔道競技の技効力と組み手に関する投技戦術行動についての競技分析的研究，順天堂大学スポーツ健康科学研究，第５号，50～60，2001

石川美久他：世界柔道選手権大会における外国人選手の競技傾向－1995年と2005年の比較－，柔道科学研究,14,19-23，2009

木幡日出男他：サッカーのゲームにおけるチーム力のスカウティングに関する因子分析的研究，東京商船大学研究報告，人文科学，34，17-32，1983

近代柔道30巻10号，ベースボール・マガジン社発行，ｐ42～ｐ47，2008

近代柔道31巻４号，ベースボール・マガジン社発行，ｐ62～ｐ63，2009

近代柔道31巻10号，ベースボール・マガジン社発行,ｐ36～ｐ38、ｐ58～ｐ66，2009

村山晴夫他：映像分析による競技特徴に関する検討－2001年世界柔道選手権大会女子57kg級優勝者の事例－，柔道科学研究，10,1－8，2005

中村　勇他：世界強豪選手の組み手とデータ－2001年世界選手権－柔道科学研究,8,1-11，2003

中村　勇他：2003年世界選手権大会の競技分析－1995～2001年の大会との比較－，柔道科学研究，9,1－6，2004

柔道科学研究 , 15, 19-22 (2010)

全日本女子強化選手の体力タイプ別分類によるトレーニング目標の作成

曽我部晋哉[1、2、3)]、園田隆二[2)]、田辺　勝[2)]、徳野和彦[2)]、吉村和郎[2)]、日蔭暢年[2)]、
斉藤　仁[2)]、木村昌彦[2)]、白瀬英春[2)]、出口達也[2)]、南條充寿[2)]、貝山仁美[2)]、薪谷　翠[2)]、
野瀬清喜[2)]、三戸範之[2)]、松雪　博[2)]、渡辺涼子[2)]、園田教子[2)]、射手矢　岬[3)]、小山勝弘[3)]

【緒言】

日本選手が世界の大会で勝つための必要な条件として、体力の向上が急務であることが挙げられて久しい。しかし、体力には様々な要素を含んでおり、一概に体力の向上として包括することはできない。外国選手の筋力に対抗するために、単純にウェイトトレーニングを中心としたトレーニングにより筋力を向上させればよい、というのもあまり懸命ではない。ウェイトトレーニングを実施する際にも、柔道の競技特性と筋の適応を十分に考慮したプログラムを作成し実施しなければ、瞬発的な力は発揮できるようになったが疲労しやすい、筋が肥大することで体重が増加し減量が厳しくなるなど、様々な問題が生じる可能性がある。それは、与えた刺激に対して身体が適応した結果[1)]であり、もし得られた結果が目的に合致した結果でなければ、長期的に実施してきたトレーニングが競技力向上に結びつかないこともある。

柔道の競技力向上のためには、柔道の競技特性を明らかにする必要があるが、明確な特性は明らかになっていない。しかし、代謝特性から考えると有酸素運動と無酸素運動の複合運動であり、しかも高強度および中等度の運動が５分以上継続するものであることは間違いない。そこで、全日本女子チームでは、「ゴールデンスコアで戦える体づくりを」との日蔭前監督の方針により、高強度の運動を継続するための能力を向上させる方法として、400m走、800m走をトレーニングプログラムの中に定期的に導入した[2)]。その結果、2008北京オリンピックまでのトレーニングプログラムにより全階級の400m、800m走のタイムが改善し有意差がみられた。この400m走は無酸素性の運動が主であるとされており、エネルギー供給機構の貢献度はATP-CP系26.7%、乳酸系55.3%、有酸素系18.0%、また800m走は、ATP-CP系18.0%、乳酸系31.4%、有酸素系50.6%であると報告[3)]されている。ATP-CP系、乳酸系を合わせた無酸素性エネルギー供給機構の割合は400m走で82.0%、800m走で49.4%となり、そのエネルギーは筋グリコーゲン、肝グリコーゲンから供給されている。そのため、高強度の運動中にグリコーゲンが枯渇すると、運動を持続することができなくなるために[4)]、テクニックがあっても瞬発的に技を掛けることができなくなること考えられる。これらの能力を改善するための代謝的なアプローチは、強い力を発揮してもグリコーゲンを節約できるようにすること[5、6)]と、解糖系で産生された乳酸をエネルギーとして再利用する能力を獲得すること[7、8)]が必要となる。実際にグリコーゲンの節約を目的とした高強度の持続する運動を継続させた場合には、定期的なトレーニングプログラム前と比較して同強度の運動を実施した場合、グリコーゲンの利用量は低下することは多くの研究から明らかになっている[5、6)]。つまり、強い力発揮が要求される場面において、力発揮の原料となるグリコーゲンが節約されることは、より長い時間強い力を発揮する能力を有することとなり、柔道においては重要な適応の一つであると考えられる。

2008年北京オリンピック終了後、強化システムが一変し2012年ロンドンオリンピックでの金メダル獲得を目指すためのナショナルチームが新設された。女子柔道ナショナルチームの園田監督は、技術面とくに寝技の強化と体力向上に力を入れる明確な方針を打ち出し、世界柔道選手権大会、オリンピックに向けた計画的な強化を図っている。実際に強化選手の中（ナショナル、シニア、ジュニア）で、ナショナルチームに所属する選手のうち、更に実績を残す選手の傾向が明らかになってきた。そこで、ナショナルチームに所属するためにはどの程度まで体力レベルが要求されるか、また世界で勝つためにはどのような特性が必要であるか、各選手の400m走、800m走の記録からトレーニングの目標となる指針を作成したい。

【方法】

2008年度全日本女子柔道強化選手、48kg級（４名）、52kg級（５名）、57kg級（６名）、63kg級（５名）、

1）甲南大学　2）全日本柔道連盟強化委員　3）全日本柔道連盟情報戦略部

70kg級（7名）、78kg級（5名）の計32名を対象とした。78kg超級については、測定データにばらつきが多いことから分析対象から除外した。対象者は2008年7月23日に400mおよび800mのタイムを測定した。2008年の測定データを分析対象としたのは、オリンピック前の測定でありトレーニングプログラムの成果が反映されていること、また当時のどのような選手が現在の全日本チームとして活躍しているかの傾向が把握できること、による理由から採用した。

まず、階級ごとに400m走および800m走の測定タイムの平均値を算出した（表1）。縦軸を800m走のタイム、横軸を400m走のタイムとし、各階級の平均タイムラインをグラフ上に記した。400m走の各階級の平均タイムラインは、48kg級～57kg級：77秒、63kg・70kg級：78秒、78kg級：85秒とし、800m走の平均タイムラインを48kg級～57kg級：178秒、63kg・70kg級：189秒、78kg級：199秒とした。階級ごとに400m走の平均タイムラインと800m走の平均タイムラインが交差する点を基準に、400m走および800m走が両方とも平均値より速いタイプをパワー持続タイプ、400m走は平均値より速いが800m走は平均より遅いタイプをパワータイプ、400m走は平均値より遅いが800mは平均値より速いタイプを持久力タイプ、400m走および800m走が両方とも平均値より遅いタイプをミディアムタイプとした（図1）。各選手の400m走と800m走の測定タイムが交わる点に印を付け、現在ナショナルチームおよび北京大会出場した選手は黒塗りの印を付けた。

表1. 各階級ごとの400m走および800m走の平均タイム

	400m走	800m走
48kg	77.0±2.0	176.8±6.3
52kg	77.6±5.1	178.0±14.1
57kg	77.2±5.3	185.8±10.7
63kg	79.8±3.1	189.8±7.2
70kg	78.6±3.5	189.8±8.4
78kg	85.5±6.0	199.2±17.7

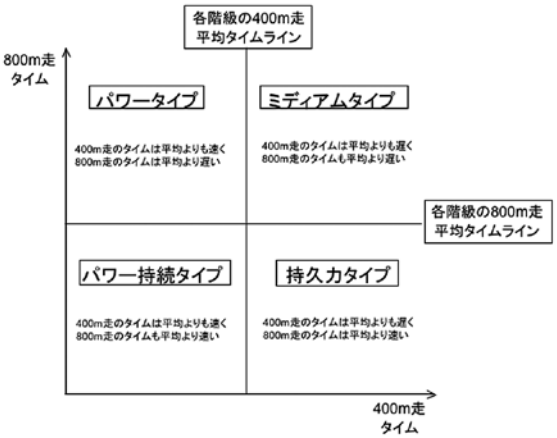

図1. 400m走および800m走の平均タイムから分類した選手タイプ

【結果】

各選手の400m走および800m走の測定タイムからグラフに印を付けたものを図2に示す。48kg級から57kg級においてナショナルチームに所属する現在IJFランキング上位の選手すべては、400m走および800m走の平均タイムを上回り、パワー持続タイプに分類された。また、63kg級および70kg級でナショナルチームに所属する3名は、400m走および800m走ともに自階級の平均値を上回りパワー持続タイプに分類され、中でも北京オリンピックで金メダルを獲得した70kg級の1名は48～57kg級の平均値を上回っていた。全日本強化選手の中には、400m走は遅いが800m走は平均値より速いという持久力タイプは存在しなかった。図2のグラフ中にアスタリスク（*）印を付けた選手は、現在の強化選手には登録されていない。

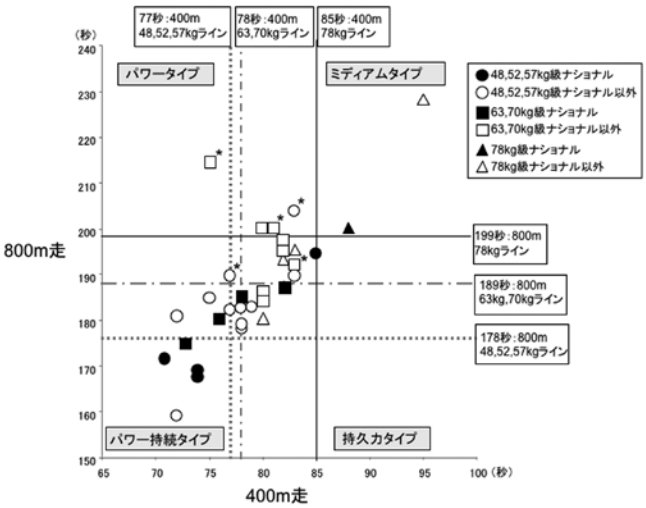

図2. 各選手の選手タイプの分類

【考察】

一時期、柔道競技における筋力向上のために、筋肥大および1RMの向上に主眼をおいたウェイトトレーニングが積極的に導入された時期があった。ウェイトトレーニングは、柔道では補えない筋に刺激を与えることができ、さらに計画的なプログラムにより比較的短期間で筋力を向上させることができる。そのため、柔道の筋力向上には欠かせないプログラムの一つである[9)]。しかしながら、身体に負荷を与え適応させるという観点から考えると、専門家に十分な生理学的意味と目的を指導してもらい実施しなければ、身体は思わぬ方向へ適応してしまう可能性がある。実際に、ウェイトトレーニングなどを総称してレジスタンストレーニングと呼ばれるが、そのようなトレーニングでは筋中のミトコンドリア系酵素は低下すると報告[10)]されており、つまり運動中のエネルギー源はグリコーゲンが中心となるため、早くグリコーゲンが枯渇しやすく強い運動が持続できなくなってしまうということである。このようなレジスタンストレーニングを中心に実施した選手は、自分自身より力の強い外国選手と対戦した場合、通常よりも早く筋グリコーゲンを使ってしまうため、相手選手よりもむしろ早く疲労してしまうような特徴が挙げられる。柔道は、ウェイトリフティングやパワーリフティング、アメリカンフットボールのように、瞬時に大きな力を発揮した後十分な休息が与えられる競技ではないために、アメリカから直輸入したウェイトトレーニングのプログラムをそのまま適応するには限界があると感じている。そのため、柔道に必要な筋力を養成するためには、ウェイトトレーニングにより筋力を向上させると同時に筋力に持久性を持たせ、さらに動きながらその能力が発揮できるように心肺系の能力も十分に養成しておく必要がある。

今回400m走と800m走のタイムから各選手の能力を分類した結果、強化選手の中でも世界で活躍する選手の多くはパワー持続タイプの選手であり、強い力が試合時間中に継続することが安定した力を発揮するために必要なことではないかと考えられた。78kg級の400m走および800m走の平均値は、極端に遅い選手のタイムに影響され随分と遅く算出されており、78kg級の競技力を向上させるためにはより十分なトレーニングが必要であると考えられた。また、図2にアスタリスク (*) が付いている選手の特徴は、400m走は比較的速く走ることができても、強い力を持続しなければならない800m走になると、最下位近くに集合している。800m走は実際の能力を反映するだけでなく、精神的な要素も強いために、気力が長続きしない選手は800m走も根気強く走ることができず、さらに強化選手として活躍する意欲にも影響が出るのではないかと考えられた。

これらのデータから、今後のトレーニングにおける目標は、パワー持続タイプの選手を育成していくために、800m走と400m走の平均値で形成される四角形の面積を小さくしていくことであり、このことによりチーム全体の体力評価をしていくことが重要ではないかと考えられた（図3）。

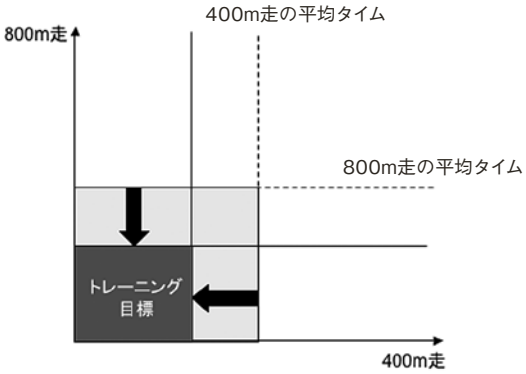

図3. トレーニング目標

【参考文献】

1) Arnold MD *et al*. Accuracy of predicting bench press and squat performance from repetitions at low and high intensity. J Strength Cond Res. (9),205-206,1995.

2) 曽我部晋哉ら:ゴールデンスコアで戦える体へ −2008北京オリンピックへ向けた女子柔道のトレーニングの取組−.柔道科学研究(14),1-6,2009.

3) Mader A. Personal communication with auther. Vancouver, British Clumbia. 1985.

4) Karlsson J., Saltin B.:Diet, muscle glycogen, and endurance performance. J Appl Physiol.(31), 203-206,1971.

5) Brooks GA. Intra- and extra-cellular lactate shuttles. Med Sci Sports Exerc. 32(4),790-9,2000.

6) Allen D and Westerblad H. Lactic acid-the latest performance-enhancing drug. Science. 20,1144-7,2004.

7) Martin WH 3rd *et al*. Effect of endurance

training on plasma free fatty acid turnover and oxidation during exercise. Am J Physiol. 265E,708-714,1993.

8) Mendenhall LA *et al*, Ten days of exercise training reduces glucose production and utilization during moderate-intensity exercise. Am J Physiol. 266E,136-143,1994

9) 曽我部晋哉ら: 強豪高校柔道部のトレーニング環境および実施内容について. 柔道科学研究(9),12-19,2004.

10) MacDougal JD, et al. Mitochondrial volume density in human skeletal muscle following heavy resistance training. Med Sci Sports 11,164-166,1979.

柔道科学研究 , 15, 23-35 (2010)

International Judo Symposium on Sports Medicine and Science

Place:Kodokan 3F, conference Room3, Tokyo
Time:10th, Dec. 2009

Chairman Taisuke Tomatsu MD
(Medical committee of All Japan Judo Federation)

1:**Screening Examination and Treatment of *T.tonsurans* Infection in Judo Athletes Affiliated with the University Judo Federation of Tokyo**
Nobuyoshi Hirose, et al

2:**About a Performance of Movement Soup Stock in Game of Elementary Child Judo**
Kume, N et al

3:**Current state and view in the future of Judotherapy Theory and Practice education −It considers this from the viewpoint of the history of Judotherapy−**
Hideo Naruse, et al

4:**Effect of Vibration Stimulus on the Amount of Local Water Content −Examination with Bioelectrical Impedance Analysis−**
Masataka Nakazawa, et al

5:**Correlation between Heart Rate on Morning Rising and Condition of Judo Players during Training Camp**
Akitoshi Sogabe, et al

6：THE INFLUENCE OF EXERCISE ON THE CHANGES IN CREATINE KINASE ACTIVITY IN THE BLOOD OF THE JUDO TEAM MEMBERS
Wieslaw Blach, et al

7:**Physical characteristics is associated with lumbar disc degeneration in adolescent judo athletes**
Koji Koyama, et al

8:**Isokinetic Evaluation of Trunk Flexion and Extension in Judo Athletes Correlation with Low Back Pain.**
Breno Schor, et al

Chairman Kenji Hirohashi MD

9:**The influence of the knee hydrarthrosis on the muscle recovery after anterior cruciate ligament reconstruction: A Comprehensive Investigation**
Takakuni Sakurai, et al

10:COMMON SITUATION OF KNEE INJURY OCCURENCES IN JUDO: A RETROSPECTIVE STUDY
Sentaro Koshida, et al

11:The martial arts shoulder physical examination and surgical findings in high-level athletes.
Breno Schor, et al
12:Elbow injuries of judo players in child and adolescent
Takeshi Kamitani, et al
13:Investigation of concussion of the brain in judokas
SEIJI Miyazaki, et al
14:A case of a forehead cutting wound by teeth in Judo athlete
Takeshi Ogawa, et al
15:Medical Support for the Blind Judo
Noriko MARUNO, et al
16:Mental Support for the World Judo Championship in Rotterdam
−Application of UK Theory to Japanese Women Team−
Masayasu FUNAKOSHI, et al
17:Attitude survey to "Doping" in training camp for promising junior high school Judo players (The second report)
S. Watanabe, et al

Abstract

1:Screening Examination and Treatment of *T.tonsurans* Infection in Judo Athletes Affiliated with the University Judo Federation of Tokyo

Nobuyoshi Hirose[1], Morio Suganami[1], Taisuke Tomatsu[2], Tadashi Murota[2], Kunio Ebine[2]
:1) Juntendo Univ. Japan, 2) All Japan Judo Federation

In Japan, the spread of T. tonsurans infection among combat sports participants continues to be a problem.
[Method] We used the hairbrush method and a questionnaire to survey athletes registered with the University Judo Federation of Tokyo who participated in National Championship judo matches in 2008. Treatment was offered to athletes who tested positive for T. tonsurans infection.
[Results] We surveyed 902 individuals (754 males and 148 females) affiliated with Judo clubs in 21 universities (males in 16 universities, females in 5 universities) and found 102 positive cases (11.3%). Males had a higher infection rate (95 cases; 12.6%) than females (7 cases; 4.7%).
Ninety individuals (88.2%) with positive hairbrush-culture results reported a history of tinea corporis, and 88 individuals (86.3%) with positive hairbrush-culture results considered themselves "asymptomatic" at the time of the examination.
Ninety-six of the 102 individuals who tested positive for T. tonsurans infection accepted treatment with oral and topical antifungal agents. After 3 months of treatment, 85 (90%) were culture-negative.

[Discussion] Compared to earlier survey findings, the current survey indicates that the number of asymptomatic carriers of *T. tonsurans* has increased among college judo athletes, and infected athletes are less likely to be aware of their status. Screening examinations should be conducted periodically throughout the entire judo federation, followed by appropriate treatment of infected athletes. Development of treatment protocols for infected athletes, including asymptomatic carriers, is a high priority.

2:About a Performance of Movement Soup Stock in Game of Elementary Child Judo

Kume N., Hashimoto N., Tokuyasu H.
Tokyo Ariake University of Medical and Health Sciences, Tokyo, Japan

Before a game of Judo, there are many cases that cannot enough warm-ups by practice field place or a limit of exercise time.
Therefore, we experience the player who cannot give a maximal performance from the first game.
We did investigation for Judo players of the elementary child whom did not know about methods of warm-up.
The investigation did the subjective evaluation that we used ten phases of scale for by change of performance when warm-up before a game.
The warm-up that we used for investigation is as follows.

1. Move a body by oneself while listening to one's favorite music.
2. Hyperthermia treatment in locus worried about oneself during a game.
3. Massages in locus worried about oneself during a game.
4. Proprioceptive Neuromuscular Facilitation: PNF in trunk, upper limbs and lower limbs.
5. Static stretching in trunk, upper limbs and lower limbs.

The subject intended for 50 peoples whom it extracted at a venture.
We divided these 50 peoples into five groups by 10 peoples and it after the game end that warm-up and evaluate indication with ten phases "there is not usually a change" to "movement in best condition".
We did the evaluation that used Chi square test for whether mea n between groups had a significant difference.

3:Current state and view in the future of Judotherapy Theory and Practice education
−It considers this from the viewpoint of the history of Judotherapy−

Hideo Naruse[1], Masataka Nakazawa[1], Takakuni Sakurai[1], Koji Koyama[1], Noboru Hashimoto[1], Akihiko Kimura[1]
1 Department of Judotherapy, Faculty of Health Sciences, Tokyo Ariake University of Medical and Health Sciences, Tokyo, Japan

Judotherapy prescribes a set of procedures for the treatment of an affected part sustained in a fracture, dislocation, contusion, sprain.
As stated above, the techniques and spiritual elements of Judotherapy are based on the *kappo* of

martial arts from which judo originated, and were subsequently expanded with a combination of eastern and western medical techniques.
After the Meiji restoration, Japan's medical systems were restructured according to a western medical model considered to be omnipotent. As a result, in 1881, traditional bonesetting fell into a almost complete disuse.
However, in 1912 a movement began for the official recognition of bonesetting businesses run by judo specialists.
As a result of their efforts, a law was passed in 1920 for the regulation of businesses using therapeutic techniques, giving official recognition to the techniques used in Judotherapy.
In 1951, the training of Judotherapists in vocational institutions started and a system regulating the school education established.
The education of Judotherapy in school is similar to the orthopaedics now.
It is unavoidable that Judotherapy Theory approaches the orthopaedics with the development of the medical knowledge.
However, I consider that the traditional bonesetting technique should instruct in the education of Judotherapy Practice handed down from old.

4:Effect of Vibration Stimulus on the Amount of Local Water Content −Examination with Bioelectrical Impedance Analysis−

Masataka Nakazawa, Takakuni Sakurai, Shogo Sasaki

Department of Judotherapy, Faculty of Health Sciences, Tokyo Ariake University of Medical and Health Sciences, Tokyo, Japan

One of the common injuries to the leg is a contusion with swelling in Judo players. Using whole body vibration (WBV) stimulus, applied by maintaining a constant position on a platform which produces three dimensional micro vibration, in this experiment, vibration stimulus was applied to women with edema in the lower extremity. To study the possibility of the edema-attenuating effect by vibration stimulus, the changes in the electrical resistance of the lower extremities were measured using bioelectrical impedance analysis (BIA), which may indicate changes in the amount of total body water (intracellular water + extracellular water). Nine women were the subjects; all underwent trials with and without vibration stimulus. The bioelectrical impedance (BI) value was measured immediately before, immediately after, and 30 minutes after the trial. In trials with vibration, BI value increased significantly, immediately and 30 minutes after the trial compared to immediately before the trial.
The results indicate that for a lower extremity with edema the vibration stimulus decreases the amount of lower extremity water content, and that the effect is long-lasting.

5:Correlation between Heart Rate on Morning Rising and Condition of Judo Players during Training Camp

Akitoshi Sogabe[1], Taketo Sasaki[2], Mitsuharu Kaya[3], Kosuke Nagaki[4], Shunsuke Yamasaki[1]

1) Education and Research Center for Sport and Health Science, Konan University, Kobe, Japan
2) Faculty of Human Development and Culture Department of Physical Education, Fukushima University, Fukushima, Japan
3) Liberal Arts Center, Hyogo University of Health Sciences, Kobe, Japan
4) Faculty of School Education, Hyogo University Teacher Education, Kato, Japan

【PURPOSE】 We attempted to determine whether measurement of heart rate on rising can be used as a simple method for assessing physical and mental conditioning. **【METHODS】** The subjects for this study were 11 male Japanese college Judo players (age: 20.5±1.4 years) who visited the United States to compete. The investigation period was 8 days. Each subject was asked to record heart rate and sleep length, evaluate his physical and mental conditions, and complete a POMS questionnaire every morning on rising. The days with the highest and lowest heart rates were extracted from the recorded data for each subject, and the sleep length, physical and mental conditions, and POMS scores on those days were compared. **【RESULTS】** Correlation coefficients between heart rate and each of the factors exhibiting significant differences were calculated. Negative correlations were found for sleep length ($r=-0.678$, $p<0.001$), physical condition ($r=-0.657$, $p<0.001$) and mental condition ($r=-0.577$, $p=0.004$) while positive correlations were found for POMS scales of Fatigue ($r=0.468$, $p=0.026$) and Confusion ($r=0.506$, $p=0.015$). **【CONCLUSION】** Although psychological condition tends to be considered less serious than physical condition, poor psychological conditioning can cause such problems as lack of sleep, which can lead to an imbalance of the autonomic nervous system and eventually to impairment of physical condition. It may also be possible to develop players' interest in and habit of managing their condition on their own by promoting them to undertake such activities as measuring their heart rate.

6：THE INFLUENCE OF EXERCISE ON THE CHANGES IN CREATINE KINASE ACTIVITY IN THE BLOOD OF THE JUDO TEAM MEMBERS

Wieslaw Blach, Juliusz Migasiewicz, Lukasz Blach

Institute: Academy of Physical Education -Wroclaw

Rational usage of training load requires searching for optimal methods of directing of the training process, based on the results of various types and forms of control (Costill & others 1992, Sozański & Zaporozanow 1993, Iskra 2001). In many sport disciplines, as well in judo, there is the possibility of evaluating the competitors body reactions on the applied training load, on the basis of the enzyme CK (creatinine kinasis) activity measurements in plasma.

The purpose of this paper was to define the extend of the size in the CK changes in plasma of judo contestants, during direct competition preparation to European Championship 2009.
There were researched 10 judo national Olympic team contestants, that were prepared to take part in EC. The study was undertaken during the national team training camp in may 2009. The CK activity marking was done every morning for 10 days. The testing blood was taken from an ear petal on an empty stomach.
The CK activity was marked by spectrophotometric method using the Dr Lange photometer-LP 400, and the ready to use "Analco" set.
The training load was analysed by using Andriejew's method.
The statistic analysis was done by students' T-test for the dependent variable and by counting values of correlation factor by Pearson. Statisticaly important level $p<0.05$.
The average values of CK for all the tested sportsmen showed fundamental differences and in some individual cases exceeded 600 UL. The results of biochemical research gain remarkable value, because they allow to evaluate actual contestants' reactions under influence of applied training load, that might be the starting point to rationall planning of consecutive trainings or microcycles. The dependence issue between the size of the training load and CK activity in plasma, requires more research, that would take under consideration analysis of training load from the point of the content as well as the intensivity.

7:Physical characteristics is associated with lumbar disc degeneration in adolescent judo athletes

Koji Koyama[1], Takakuni Sakurai[1], Shogo Sasaki[1], Takayuki Fukui[2], Yoshiaki Kubo[2], Keiko Yamamoto[2], Masataka Nakazawa[1], Osamu Yuzuki[1]

1 Department of Judotherapy, Faculty of Health Sciences, Tokyo Ariake University of Medical and Health Sciences, Tokyo, Japan
2 The Japan School of Judo-Seihuku Therapy, Tokyo, Japan

We investigated the relationship between lumbar disc degeneration (LDDG) and physical characteristics in adolescent judo athletes. The subjects were 21 adolescent judo athletes (mean age 15.9) . The examined parameters were physical characteristics, spinal curvature and cross-sectional areas (CSAs) of trunk muscles. Disc degeneration was evaluated using T2-weighted magnetic resonance imaging. The degree of degeneration was classified into 5 grades according to Pfirrmann's classification, with grade Ⅲ or more considered degenerated. The orthopedist, one of us, evaluated the LDDG. According to this evaluation, we assigned all judo athletes into two groups as the LDDG group (n=15, 71.4%) and the no LDDG group (n=6, 28.6%). As a results, extension- range of motion at thoracolumbar area in the LDDG group was significantly lower than that in the no LDDG group ($P<0.05$). In the spinal curvature and CSAs, there was no significant difference between the LDDG and the no LDDG group in this study. These results suggest that the decrease extension-range of motion at thoracolumbar may be one of some factors related to LDDG in adolescent judo athletes.

8:Isokinetic Evaluation of Trunk Flexion and Extension in Judo Athletes Correlation with Low Back Pain.

Breno Schor, Wagner Castropil, Alexandre Carneiro Bitar, Thiago Takara.
Institute Vita, São Paulo, Brazil.

Judo training is specific and based on a great number of repetitions. This type of training leads to muscle asymmetries and unbalance. Furthermore, the literature indicates a high incidence of low back pain in judo athletes. (Iwai et al, 2004). The aim of this study was to assess trunk muscles isokinetically and analyse the correlation between sex, dominance, low back pain and weight.

We evaluated 45 judo athletes, male and female, with ages between 18 and 34 years old (Black and Brown belts). All the substects were tested on the isokinetic dynamometer Cybex NORM and peak torques of trunk extensor (PTEX) and flexor (PTFX) muscles were measured at angular velocities of 60 and 120deg/sec.

There was no statistically difference between sex, low back pain and dominance ($p > 0.05$). We also found a weight x flexor/extensor relation of 0.511 (60 deg/sec) and 0.488 (120deg/sec). We concluded that there is direct correlation between flexion/extension and weight ($p < 0.05$) and a increase of 1 kg in athlete's weight makes the flexion/extension relation increase 0.002.

9:The influence of the knee hydrarthrosis on the muscle recovery after anterior cruciate ligament reconstruction: A Comprehensive Investigation

Takakuni Sakurai[1], Shogo Sasaki[1], Mako Fukano[2], Toru Fukubayashi[3]

1 Department of Judotherapy, Faculty of Health Sciences, Tokyo Ariake University of Medical and Health Sciences, Tokyo, Japan
2 Graduate School of Sports Science, Waseda University, Saitama, Japan
3 Faculty of Sports Science, Waseda University, Saitama, Japan

INTRODUCTION:

Anterior cruciate ligament (ACL) injuries often occur in Judo. Regaining muscle volume and strength is important for recovery and a quick return to Judo following ACL reconstruction. But periarticular swelling which often accompanies edema or hydrarthrosis is appeared after ACL reconstruction. However, the effect of the hydrarthrosis on the functional muscle recovery occurring after surgery has been unknown.

The purpose of this study was to examine the influence of hydrarthrosis on recovery of the muscle activation, the knee extension torque and the volume of the quadriceps femoris.

METHODS:

All patients who were to have ACL reconstruction with quadrupled semitendonosus tendon by same orthopeadic doctor participated in this study. Subjects were divided into two prognostic groups: hydrarthrosis group and no hydrarthrosis group or absence of hydrarthrosis for three months after surgery. Bioelectrical Impedance (BI) analysis, isokinetic knee torque,

simultaneous surface electromyograms, and magnetic resonance imaging were used in this study.
RESULTS:
The BI of the lower extremity decreased in both groups at post operative one month. Recovery of the knee extension torque was tending to be delayed with hydrarthrosis. With regard to the volume of the quadriceps femoris with hydrarthrosis showed considerable reduction in three and six months after surgery.

10:COMMON SITUATION OF KNEE INJURY OCCURENCES IN JUDO: A RETROSPECTIVE STUDY

Sentaro Koshida[1], Tatsuya Deguchi[2], and Toshihiko Hashimoto[1]

1) Faculty of Health Sciences, Ryotokuji University, Urayasu, JAPAN
2) Graduate School of Education, Hiroshima University, Higashi-Hiroshima, JAPAN

Although high prevalence of knee injuries in judokas has been reported, there has been very little research concerning events preceding the injury. In order to establish an effective preventive strategy for judokas, the events that incite knee injuries in judo need to be studied specifically. Therefore, the purpose of this study was to demonstrate and analyze the incidents of knee injuries in judo. We investigated 113 cases of knee injuries occurred during judo competition or practice by using questionnaires to obtain information regarding injury situation, subject's behavior, injury mechanisms, and techniques that caused the knee injuries. We then conducted a chi-square test followed by multiple comparison to determine the statistical differences in each category ($p<0.05$). Although the number of knee injury occurrences was significantly higher when the subject was attacked by the opponent than when the subject attempted an attack, met with an accident, and was counterattacked, it is still noteworthy that more than 30% of the knee injuries occurred in an accident or during attack attempt. The result may help judokas recognize and avoid high risk situations of knee injury in judo though further analysis with larger sample size must be necessary.

11:The martial arts shoulder physical examination and surgical findings in high-level athletes.

Breno Schor, Wagner Castropil, Alexandre Carneiro Bitar, Thiago Takara.
Instituto Vita, São Paulo, Brazil.

The authors prospectively evaluated 89 high-level athletes of judo between 2001 and 2007 and found interesting sport specific changes in shoulder joint.
The athletes (54 male, 35 female) had mean age of 27.8 years (17 to 37). Physical examination assessed range of motion, scapulothoracic dyskinesia according to Kibler's classification and shoulder stability and impingement using special tests. Photogrammetry was performed searching for asymmetry in shoulder and scapulothoracic posture. Arthroscopic surgery was performed in 43 shoulders.

We found loss of internal rotation in 73.33% and external rotation in 86.66%, shoulder elevation in 81.30% and scapulothoracic dyskinesia in 49.15% of patients, especially in the dominant shoulder.
We found anterior labrum detachment in 39.53%, SLAP lesion in 37.20%, posterior labrum detachment and erosion of posterior aspect of the glenoid in 30.23%, rotator cuff injuries in 18.60% and acromioclavicular osteolysis in 13.95% of patients.
We understand that martial arts fighter assume a position many times in adduction, flexion and internal rotation of the shoulder that can produce a scapulothoracic dyskinesia and overpressure at the acromioclavicular joint and anterior labrum.
This position can overtime lead to degenerative changes in the posterior aspect of the glenoid, anterior and superior labral tears as well as anterior impingement.

12:Elbow injuries of judo players in child and adolescent

Takeshi Kamitani

Department of Orthopeadic Surgery, Tokyo Kouseinenkin Hospital, Tokyo, Japan
All Japan Judo federation, Team Doctor

<Purpose>
The purpose of this study is to investigate the situation on elbow injuries of judo players in child and adolescent
<Method>
We examined 89 players at Kodokan Judo Institute : 65 males 24 females. Using questionnaire, we asked any history of pain, especially its location and cause. We also performed physical examinations and ultrasonographic examinations to check for osteochondritis dissecans of the capitellum.
<Results>
Forty five players (fifty one percents) experienced elbow pain. We found posterior, medial, lateral and anterior site of the elbow in 24, 9, 4 and 2 players respectively. The posterior pain was the most frequent.
The posterior pain was caused by hyperflexion (Seoi-nage) and hyperextension (Kumite and Landing on one's hand when being thrown).
Range of motion was restricted in 12 players, 7 players in flexion, and 5 players in. extension.
We could not detect osteochondritis dissecans of the capitellum in ultrasonography.
<Conclusions>
1) Fifty one percents players have had elbow pain, the posterior pain is the most frequent.
2) The posterior pain of the elbow was caused by hyperflexion and hyperextension.

13 Investigation of concussion of the brain in judokas

SEIJI Miyazaki, NOBUYUKI Sato, TOSHIAKI Hashimoto, HIDEHARU Shirase, YASUHIRO Yamashita, HIDETOSHI Nakanishi, KENICHIRO Agemizu

SCHOOL of Physical Education, TOKAI University

The report of the head injury by the judo is often seen, and knowledge and treatment to the head injury become it importantly in recent years. The frequency of judoka's concussion of the brain and the tendency were investigated. The concussion of the brain was investigated for 1443 judokas [1000 men and 443 females, 24 Company employees (23 men and 1 female), 348 junior high school students (289 men and 59 females), 454 high schools (367 men and 87 females) and 617 university students (321 men and 296 females)]. Time when the concussion of the brain was caused was 114 elementary school people, 265 junior high school people, 194 high school people, 80 university people, and 2 members of society. As for the frequency of the concussion of the brain, the time of the junior high school and the high school was the highest with 18-19%. The frequency of the concussion of the brain did not change at the beginning time of the judo. It is 90% or more that the time thrown out causes the concussion of the brain. There were a lot of OOSOTOGARI in 37% of the whole. Moreover, the time that had been thrown out by the technique for throwing out backward accounted for 54% and many. The concussion of the brain happens easily to the junior high school and the high school student, and happens easily because of an immature throwing technique and immature UKEMI.

14:A case of a forehead cutting wound by teeth in Judo athlete

Takeshi Ogawa, Tae Kyung Kim, Naoyuki Okada
Ryoutokijigakuen medical college, Japan

We know Judo players experience many injuries in "Randori". Main author(T.O.) is very high-level Judo athlete, who injured his forehead cutting wound by teeth when he threw his opponent away by "Tomoe-nage". His wound sutures by his neighborhood doctor and he thought it would heal within several days, but it got worse caused by bacteria with teeth. So his all threads of his wound were cut after 2 day he sutured and the wound was opened and washed by saline water. Intensive wound anti-biotic therapy got improved his wound, so he could participate important Judo match seven days after he injured. Generally the wound by teeth is very dirty, so the correct treatment is also important in Judo healthy athlete.

15:Medical Support for the Blind Judo

Noriko MARUNO[1], Miyuki KATAI[1], Toshihiko HASHIMOTO[2]

1) Dept. of Gender Specific Medicine, Medical Center East, Tokyo Woman's Medical University, Tokyo, Japan
2) Dept. of Sports Medicine, T Medical Center East, Tokyo Women's Medical University, Tokyo, Japan

There are three goals when learning judo: spiritual development, good physical health and self-defense. It is very important for the visually impaired to fall the right way. Learning the

right and secure position will help them not to have any more or less dangerous accident in everyday life. Fall exercises in judo develop motion skills.
IBSA (International Blind Sports Association) has established the following categories for qualification: B1, B2 and B3. Each nation shall register only one athlete per weight as a category in paralympic games and world championships. Visual groups B1, B2 and B3 will compete together. The duration of each combat is 5 minutes. At the starting of combat, the athletes will bow to each other. The referee will then have them raise their arms for the fundamental kumi-kata. The two competitors are facing and holding with one hand on the other's judogi sleeve and with the other hand holding the opposite revers. Competitors must not release hands until hajime has been announced.
During the summer training camp it was recognized that cooking for oneself is a problem. Adequate dietary food menu with suitable cooking methods for the blind athlete should be prepared.

16:Mental Support for the World Judo Championship in Rotterdam
−Application of UK Theory to Japanese Women Team−

Masayasu FUNAKOSHI[1], R. WATANABE[2], T. DEGUCHI[3] and N. UCHIMURA[4]

[1]Osaka Society for Syudy of Psycho-Diagnostic Method, Japan
[2]Kanazawa. Gakuin University, [3]Hirosima University and [4]Osaka Sangyo University, Japan

The UK* data about 4000 centering on senior reinforced players has been accumulated in All Japan Judo Federation since the Munich Olympics. From mental characteristics of the player who left the good record induced there, following four points were confirmed, providing with ① specific individuality for the judo, ② high mental health degree, ③ high mental energy level and ④ desire・power・tenacity.
The mental support based on these results was continued in the main international game among the past 25 years. To seven female players who participated in the world Judo championships at Rotterdam in 2009, the UK-test had been executed after the representative was decided and about a month before Olympic game was begun.
At the same time, the mental support based on the UK theory had been executed to the player and the couching staff, through the interview and the document report of the observation of behavior in the accompaniment on the 13th, four training camp and nine night stay. The support passage and the results were as follows.

1) The tendency to concentrate on a specific character pattern was admitted this time. Types 8 INTROVERTED were four people in ten all patterns, types 3-1d CAREFUL were 2 people next, and other types were only 1 person.
2) Compared with immediately after the selection of representative, in about one month before the Olympic, all members showed some symptoms overstrain, unstableness of emotion, slow starter and mental energy declined. Consequentially, players who decreased a mental health degree were four persons and the player who had gone up was only one person.

3) In the mental energy level, players who showed A stage of high efficiency were four people, and players who showed general adult level A stage were three people. It reached the level that all members were able to aim at the medal.
4) The player who showed the desire, power, and stickiness was only one person. The player who intended stability for the over-tension occupied four many. Further, the player with a slow start and one player of the energy decline were admitted.

The player who participated for the first time had the majority, and the experienced person was not in the state of thorough. However, the good record in three victory people and two 3rd place people was left though the data of the psychological testing was slack. The reason for the success might be the one by having tried measures according to individuality by applying the UK theory to the slump.

It widened one's view to the player with a strong tension and room was given. The doctor's diagnosis was believed and an emotionally unstable player due to injury was concentrated on her best demonstrating. Some advices succeeded in the slow starter by emphasizing the thoroughness in warming-up. However, the player of the energy decline did not move into high gear to the last minute, and became the trigger of the retirement. The young man player who had power missed medaling due to injury under the game because of overheating. We want to add these some points.

＊ UK：Uchida・Kraepelin Psycho-Diagnostic Test

17: Attitude survey to "Doping" in training camp for promising junior high school Judo players (The second report)

S. Watanabe[1)3)], K. Ebine[2)3)], K. Tsuyuki[2)3)], Y. Ohe[3)], Y. Ohzeki[2)3)], Y. Anai[3)], S. Takemura[3)], Y.Konno[3)]

1) Kanagawa Institute of Technology, Kanagawa, Japan, 2) Odawara Cardiovascular Hospital, Kanagawa, Japan, 3) All Japan Judo Federation, Tokyo, Japan

【Introduction】We conducted consciousness investigation about the anti-doping for junior high school judo players by a training camp, and we reported the results last year. We conducted investigation similar to the last year by the training camp in current year. The purpose of the present study is to analyze the result of the survey according to age, athletic career and the domicile. Furthermore, the anti-doping lecture at training camp considered whether there was an educational effect. 【Method】The number of junior high school Judo player made the object of this survey, 376 men and 213 women. The question of the survey is "Do you know word "Doping?", "Do you know the harmful substance might be contained in the medicine and supplement?", "To became a gold medalist in the Olympics, is "Doping" act done?", "To became a gold medalist in the Olympics, is "Doping" act done, if a violation is not found out?" 【Result】Player with lower age and/or less athletic career are considered to have less information on "Doping". Players in Chubu area are found to have more knowledge on "Doping and Supplements", compared with those in other areas. Before and after a lecture, the subject

that we answered that “the violation was good if we could win a gold medal by the Olympics” decreased. 【Conclusion】Even if the above-mentioned result increased subjects, it was similar to a tendency of the last year (The first report). Also, our lecture brought some education effect by a training camp in current years. It is necessary to do reinforced educational guidance for players in order that all players will not commit “Doping” as much as possible in the future.

日本柔道史年表　1966→1975

渡邉　昌史（早稲田大学）

年	全柔連の歴史・国内の柔道界	世界の柔道及び日本の成績
昭和41 （1966）	3.10 **「講道館柔道試合審判規定」改正**　「規程」→「規定」。近代的柔道の意義を大いに盛り込み、国際的な利用と範囲を加味した。投げられた者の全身が場外に出ても効果が認められるようになった。危険防止として、試合畳を128畳にして広げ、次に50畳を設えるとした。など。なお、この年は試合場の段差が解消された。 3.10－12 **第1回柔道指導者講習会（全柔連主催）実施** 4.30－5.1 **全日本柔道選手権大会**（日本武道館）　①松永満雄（四国）、②坂口征二（推薦）、③松阪　猛（四国）、前島延行（東海） 6.18－19 **第15回全日本学生柔道優勝大会**（日本武道館）　中央大が初優勝、②日本大、③天理大、同志社大 6.26 **第4回全警察・全実業・全学生対抗柔道試合**（警視庁武道館）　軽量級5名、中量級6名、重量級9名の計20名による点取り試合。全学生は世界学生選手権に代表を派遣したせいもあり、最下位に低迷。全警察が初優勝。 7.10 **第16回全日本実業団対抗柔道大会**（福岡市）　1部・倉敷レイヨンが博報堂を代表戦3回目で降し優勝。2部・①東洋レーヨン、②博報堂 7.23－24 **第40回金鷲旗争奪高校柔道大会**（九電記念体育館）　①鎮西（熊本）、②鹿本（熊本）、③中津工業（大分）、柳川商業（福岡） 8.1－3 **第15回全国高等学校柔道大会**（青森市）　団体：①鹿児島実業（鹿児島）、②崇徳（広島）、③砺波（富山）、南筑（福岡）。個人：軽量級・藤木隆男（盈進）、中量級・河原月夫（中京商業）、重量級・一戸隆男（鎌倉）がそれぞれ優勝。 8.28 **全日本招待選抜柔道体重別選手権大会**（九電体育館）　九州柔道協会・西日本新聞社の共催。全柔連後援。以降、体重別の大会が恒例化した。軽軽量級・稲田　明（福岡大）、軽量級・中谷雄英（三菱レイヨン）、中量級・遠舛信一（東洋レーヨン）、重量級・松永満雄（高知県警）がそれぞれ優勝。 10.18－19 **全国警察柔道大会**（日本武道館）　団体A：①大阪、②愛知。団体B：①兵庫、②熊本。個人：軽量級・冨士岡　登（熊本）、重量級・岩釣兼生（兵庫）がそれぞれ優勝。中量級は痛み分けで優勝預かり、坂田伝実雄（兵庫）、土山　宝（京都）	5.28－29 **第1回アジア柔道選手権大会**（フィリピン・マニラ）　全階級制覇。軽量級・①山崎祐次郎（天理大）。中量級・①関根　忍（中央大）。重量級と無差別はいずれも前島延行（三菱重工）と佐藤治（倉レ）の決戦となり、前島が二冠。無差別・③関根　忍 6.26 **第1回世界大学柔道選手権大会**（チェコスロバキア・プラハ）　第3回欧州学生柔道選手権大会より名称変更。日本は団体優勝。70kg級・①園田義男（福岡工大）。80kg級・①栗原泰郷（日本大）。93kg級・①笹原富美雄（天理大）、②笹川正明（東洋大）。篠巻政利（明治大）は93kg超級と無差別では笹原を下して二冠。

年	全柔連の歴史・国内の柔道界	世界の柔道及び日本の成績
	10.24－26 **第21回国民体育大会柔道競技**（大分市）　競技別総合・①大分。一般男子・①愛知、②京都。教員男子・①大分、②福岡。高校男子・①静岡、②千葉 11.5－6 **第18回全日本学生柔道選手権大会**（大阪府立体育会館）　軽軽量級・東　秀光（大阪商業）、軽量級・田畑隆璋（国士舘）、中量級・山下雅之（早稲田）、重量級・須磨周司（明治）、超重量級・西村昌樹（拓殖）、無差別・山本裕祥（明治）がそれぞれ優勝。 11.6 **第18回全日本学生東西対抗柔道試合**（大阪府立体育会館）　初の引分。 11.10－11 **第15回全国青年大会柔道競技**（講道館）　団体：①品川区。軽量級・井上和雄（愛知）・和泉　豊（福岡）、中量級・大谷賢慈（大阪）、無差別・竹内政光（東京）がそれぞれ優勝。 11.13 **第2回全日本選抜柔道団体優勝大会**（愛知県体育館）　東洋レーヨンが初優勝、②警視庁、③大阪府警、天理大学 11.23 **第14回全日本産業別柔道大会**（講道館）　機械部門が優勝。	
昭和42（1967）	3.15 **講道館柔道試合審判規定に追加して、「柔道試合における礼法」を制定、実施。** 3.27－4.16 **全国高校選抜チーム、米国へ**　アメリカ柔道有段者会の招きで役員・選手16名が米国遠征を行った。以降毎年、柔道を通じた国際交流を実施。 4.29－30 **全日本柔道選手権大会**（日本武道館）　中量級の岡野　功（近畿）が初優勝、負傷のため世界選手権は辞退。②佐藤宣践（東京）、③佐藤幸二（東北）、松阪　猛（近畿） 6.4 **第17回全日本実業団対抗柔道大会**（名古屋市）　1部・①博報堂、②旭化成。2部・①八幡製鉄堺、②東レ愛知 6.13 **全柔連専門委員会**　全柔連理事会において、財務、審判規定研究、審判員選考、アマチュア資格審査、強化、普及研究、国際、国体の8専門委員会の構成が決定した。 6.24－25 **第16回全日本学生柔道優勝大会**（日本武道館）　①天理大、②拓殖大、③中央大、明治大 7.2 **第5回全警察・全実業・全学生対抗柔道試合**（警視庁武道館）　軽量級5名、中量級6名、重量級9名の計20名による点取り試合。三者とも1勝1敗の同率で優勝は預り。	6. **日ソ親善柔道大会**　5階級各2名ずつの団体戦。大阪大会（9日）6-2で勝利を収めるも、全日本選手権者・岡野　功がサンボの選手に開始20秒で腕挫十字固に極められ完敗。九州大会（11日）11-4、東京大会（13日）5-0と3連勝 6.13 **日ソ対抗柔道大会**（ソ連）　選手11名を派遣して、各地で3試合を行い、8-1、6-1、7-0で圧勝した。 8.8 **国際柔道試合審判規定の制定**　IJF総会で決定。翌日の世界選手権から採用 8.9－11 **第5回世界柔道選手権大会**（アメリカ・ソルトレイクシティー）　6階級中5階級を制覇。軽量級・①重岡孝文（大分上野丘高教）、②松田博文（関西大）。軽中量級・①湊谷　弘（天理大出）、③

年	全柔連の歴史・国内の柔道界	世界の柔道及び日本の成績
	7.22－23 **第41回金鷲旗争奪高校柔道大会**（九電記念体育館）　①鎮西（熊本）=V2、②福岡電波（福岡）、③鹿児島実業（鹿児島）、鹿児島商業（鹿児島） 8.5－7 **第16回全国高等学校柔道大会**（高岡市）　団体：①鎮西（熊本）、②砺波（富山）、③崇徳（広島）、嘉穂（福岡）。個人：軽量級・鹿子木信一（山鹿）、中量級・野村豊和（天理）、重量級・新保正明（工学院）がそれぞれ優勝。今大会より、個人試合3階級の体重区分を変更した。軽量級58kg→60kg、中量級68kg→70kg、重量級68kg超→70kg。 9.10 **第6回全日本実業団東西対抗柔道大会**（愛媛県立体育館）　西軍、不戦1人で初優勝。 10.1 **第15回全日本東西対抗柔道大会**（宇都宮市）　再び、所属都道府県選手1名を含む30名編成の勝ち抜き試合となった。西軍、不戦2人で連勝。 10.23－25 **第22回国民体育大会柔道競技**（秩父市）　競技別総合・①大阪。一般男子・①大阪、②福岡。教員男子・①大分、②愛知。高校男子・①奈良、②広島 11.4－5 **第19回全日本学生柔道選手権大会**（大阪府立体育会館）　軽量級・水信　健（国士舘）、軽中量級・田畑隆璋（国士舘）=V2、中量級・園田　勇（福岡工業）、軽重量級・野口泰三（青山学院）、篠巻政利（明治）、無差別・笹原富美雄（天理）がそれぞれ優勝。 11.5 **第19回全日本学生東西対抗柔道試合**（大阪府立体育会館）　東軍、不戦2人で優勝。 11.8 **全国警察柔道大会**（日本武道館）　団体A：①警視庁、②大阪。団体B：①愛媛、②宮城。個人：軽量級・東　秀光（岐阜）、中量級・平尾勝司（長崎）、重量級・岩釣兼生（兵庫）=V2、がそれぞれ優勝。 11.9－10 **第16回全国青年大会柔道競技**（講道館）　団体：豊田市。軽量級・山内勝治（長崎）、中量級・桜井豊（北海道）、無差別・矢野久男（東京）がそれぞれ優勝。 11.19 **第3回全日本選抜柔道団体優勝大会**（愛知県体育館）　大阪府警が初優勝、②博報堂、③明治大、天理大 11.23 **第15回全日本産業別柔道大会**（講道館）　繊維部門が優勝。	中谷雄英（三菱レイヨン）。中量級・①丸木英二（丸木木材）、③遠劦信一（東洋レーヨン）。軽重量級・①佐藤宣践（博報堂）、②佐藤治（倉敷レーヨン）。重量級・②前島延行（三菱重工）、③松阪　猛（大阪府警）。無差別・①松永満雄（大阪府警）、③篠巻政利（明治大） 日本選手団：団長・浜野正平（強化委員長）。監督・松本安市（天理大教）。コーチ・神永昭夫（富士製鉄） 日本人審判員：久永貞男（強化委員）、広瀬　巌（大阪府警）、大澤慶己（早稲田大教）。今大会より、IJF国際審判員制度が実施された。 8.27－30 **ユニバーシアード東京大会柔道競技**（日本武道館）　全6階級及び団体優勝。軽量級・園田義男（福岡工大）、軽中量級・山崎祐次郎（天理大）、中量級・園田　勇（福岡工大）、軽重量級・二宮和弘（天理大）、重量級・西村昌樹（拓殖大）、無差別・篠巻政利（明治大）がそれぞれ優勝。 9.6－8 **第2回世界大学柔道選手権大会**（ポルトガル・リスボン）　6階級中5階級を制覇、団体戦は失点ゼロの完全優勝。軽量級・水信　健（国士舘大）、中量級・橋本　昇（天理大）、軽重量級・須磨周司（明治大）がそれぞれ優勝。重量級は日本勢同士の決勝、中川良夫（早稲田大）が高木長之助（日本大）を下し制す。 10.7 **アジア柔連総会**（講道館）　嘉納履正・会長、広瀬祐一・事務総長が再任された。
昭和43 (1968)	2.3 **日本武道学会　発足** 4.27 **嘉納師範三十年祭　挙行**	

年	全柔連の歴史・国内の柔道界	世界の柔道及び日本の成績
	4.28－29 **全日本柔道選手権大会**（日本武道館）　松阪　猛（近畿）が初優勝、②岡野　功（推薦）、③佐藤宣践（東京）、松永満雄（近畿） 5.1 **「講道館柔道試合審判規定」改正**　国際規定を国内でも適用してもよいと思われるものについて改正された。宣告等のゼスチャー、試合終了を表明する「それまで」を加えた。 6.15－16 **第17回全日本学生柔道優勝大会**（日本武道館）明治大が早稲田大を降して東京大会決勝の雪辱を果し、10度目の優勝。③東洋大、関西学院大 6.30 **第18回全日本実業団対抗柔道大会**（岡山市）1部・①富士製鉄、②博報堂。2部・①富士製鉄広畑、②東レ愛知 7.14 **全警察・全実業対抗柔道試合**（警視庁武道館）開催時期が遅れ、学生は不参加。軽量級9名、中量級11名、重量級15名の計25名による点取り試合。全実業が10-6で優勝。 7.22－23 **第42回金鷲旗争奪高校柔道大会**（九電記念体育館）　①福大大濠（福岡）、②鎮西（熊本）、③福岡電波（福岡）、鹿児島実業（鹿児島） 7.29－31 **第17回全国高等学校柔道大会**（福山市）　団体：①天理（奈良）、②盈進（広島）、③鎮西（熊本）、福大大濠（福岡）。個人：軽量級・決勝は川口孝夫と南　喜陽の崇徳高の同門対決となり、先輩・川口が制す。中量級・藤猪省三（天理）、重量級・松永義雄（砺波）がそれぞれ優勝。 8.4 **第2回全日本選抜柔道体重別選手権大会**（佐賀県体育館）　大会名を改称。軽量級・東　秀光（岐阜県警）、軽中量級・山崎祐次郎（宮崎県警）、中量級・平尾勝司（佐世保商高教）、佐藤宣践（博報堂）がそれぞれ優勝。 10.2－4 **第23回国民体育大会柔道競技**（春江町）　競技別総合・①熊本。一般男子・①兵庫、②岡山。教員男子・①大分=V2、②福井。高校男子・①熊本、②広島 10.9 **「講道館発祥の地」建碑式挙行**　講道館創設85周年、嘉納師範没後30周年を記念して、永昌寺（台東区）境内に建立。 11.2－3 **第20回全日本学生柔道選手権大会**（大阪府立体育会館）　軽量級・江種英明（福岡工業）、軽中量級・津沢寿志（中央）、中量級・園田　勇（福岡工業）=V2、軽重量級・須磨周司（明治）、重量級・中川良夫（早稲田）、無差別・篠巻政利（明治）=V2、がそれぞれ優勝。	10.23－25 **第6回世界柔道選手権大会**（メキシコ・メキシコシティー）　全6階級制覇。軽量級・園田義男（日本運送）、軽中量級・湊谷　弘（金沢工大教）=V2、中量級・園田　勇（福岡工大）、軽重量級・笹原富美雄（神奈川県警）、重量級・須磨周司（明治大）、無差別・篠巻政利（富士製鉄）がそれぞれ金メダル。 軽量級・野村豊和（天理大）、軽中量級・河野義光（自営）、中量級・平尾勝司（佐世保北高教）は

年	全柔連の歴史・国内の柔道界	世界の柔道及び日本の成績
	11.3　**第20回全日本学生東西対抗柔道試合**（大阪府立体育会館）　東軍が不戦４人で連勝。西村昌樹（拓大）が５人抜きの活躍 11.5　**全国警察柔道大会**（日本武道館）　団体A・①警視庁=V２、②大阪。団体B・①京都、②秋田。個人：軽量級・長谷川大恭（福井）、中量級・鳥越良雄（警視庁）、重量級・加藤雅晴（警視庁）がそれぞれ優勝。 11.11－12　**第17回全国青年大会柔道競技**（講道館）　団体：区郡市から都道府県単位に変更された。愛媛が優勝。軽量級・矢田栄一（東京）、中量級・武下快夫（神奈川）、無差別・浦川真義（徳島）、沖　英明（神奈川）がそれぞれ優勝。 11.23　**第16回全日本産業別柔道大会**（蒲郡市）　機械部門が優勝。 11.24　**第４回全日本選抜柔道団体優勝大会**（愛知県体育館）　警視庁が初優勝、②博報堂、③明治大、富士製鉄	日本勢決戦で２位。軽重量級・川端智幸（大分県警）、重量級・松永満雄（大阪府警）、佐藤宣践（東海大教）は３位 日本選手団：団長・浜野正平（強化委員長）、監督・神永昭夫（富士製鉄）、コーチ・猪熊　功（東海大教） 日本人審判員：清水正一（日本体育大教）、松本安市（東海大教）、夏井昇吉（警察学校教）
昭和44（1969）	4.27　**全日本柔道選手権大会**（日本武道館）　小兵・岡野　功（東京）が２年ぶり２度目の制覇。②前田行雄（東京）、③村井正芳（東京）、園田　勇（九州） 5.7　**全国警察柔道選手権大会**（日本武道館）　本年より、体重別個人戦が無差別の選手権として独立。決勝は大阪府警同士の松永満雄と松阪　猛の対戦となり、延長２回判定により松永に凱歌が上がる。 6.8　**第19回全日本実業団対抗柔道大会**（静岡市）本年より、勝抜き試合に変更。１部・①富士製鉄広畑、②河合楽器。２部・①三菱重工名古屋、②東レ滋賀 6.14－15　**第18回全日本学生柔道優勝大会**（日本武道館）①日本大、②拓殖大、③近畿大、天理大 6.22　**第６回全警察・全実業・全学生対抗柔道試合**（警視庁武道館）　選手は軽量級５名、中量級６名、重量級９名による計20名で点取り試合。全警察が９-４で全実業、６-３で全学生を下して優勝。 7.3　**「児童生徒の運動競技について」（文部次官通達）**　中学・高校の対外試合は都道府県内を原則とする。但し、中学は隣接都道府県程度、高校は地方・全国的大会への参加は、年１回程度にとどめるものとする。など。 7.22－23　**第43回金鷲旗争奪高校柔道大会**（九電記念体育館）　①嘉穂（福岡）、②南筑（福岡）、③鹿児島実業（鹿児島）、福大大濠（福岡）	

年	全柔連の歴史・国内の柔道界	世界の柔道及び日本の成績
	8.2－4 **第18回全国高等学校柔道大会**（渋川市）　団体：天理（奈良）が連覇、②嘉穂（福岡）、③前橋商業（群馬）、鎮西（熊本）。個人：軽量級・南　喜陽（崇徳）、中量級・吉村和郎（柳川商業）、重量級・原　吉実（南筑）がそれぞれ優勝。 8.10 **第3回全日本選抜柔道体重別選手権大会**（九電記念体育館）　軽量級・湊谷　弘（金沢工大教）、中量級・園田　勇（福岡工大）、軽重量級・笹原富美雄（神奈川県警）、重量級・篠巻政利（富士製鉄）がそれぞれ優勝。 8.16 **第7回全日本実業団東西対抗柔道大会**（愛媛県立体育館）　東軍、不戦1人。以降休止。 10.17 **全国警察柔道大会**（日本武道館）　1部・①大阪、②警視庁。2部・①福岡、②鹿児島 10.27－29 **第24回国民体育大会柔道競技**（佐世保市）　競技別総合・①長崎。一般男子・①東京、②兵庫。教員男子・①長崎、②埼玉。高校男子・①広島、②長崎 11.1－2 **第21回全日本学生柔道選手権大会**（大阪府立体育会館）　本年より、体重別2階級と無差別の選手権となった。軽量級・津沢寿志（中央大）=V2、中量級・後藤誠一（中央大）が優勝。正木照夫（拓殖大）が選手権を制し学生日本一。 11.2 **第21回全日本学生東西対抗柔道試合**（大阪府立体育会館）　2度目の引分。通算成績、東軍の15勝4敗2分。 11.9－10 **第18回全国青年大会柔道競技**（講道館）　団体：再び区郡市単位となると共に、一つの職場で1チームを構成する都道府県代表の2部を新設した。1部・吹田市、2部・愛知が優勝。軽量級・藤川豊久（徳島）、中量級・泉　昌（和歌山）、無差別・細川美和（神奈川）、滝本光弘（福岡）がそれぞれ優勝。 11.16 **第5回全日本選抜柔道団体優勝大会**（愛知県体育館）　富士製鉄が初優勝、②大阪府警、③警視庁、拓殖大 11.23 **第17回全日本産業別柔道大会**（大阪市立修道館）機械部門が連覇。	
昭和45 (1970)	4. **全国中学校体育連盟柔道競技部が発足**　前年7月の文部次官通達により、中学校柔道の全国組織の結成の機運が高まり発足した。 4.26 **第1回全日本柔道ジュニア選手権大会**（講道館）全柔連強化委員会は、第一線級選手の強化だけでなく、次代の担い手となる若い素材発掘・育成に	

年	全柔連の歴史・国内の柔道界	世界の柔道及び日本の成績
	も力を注ぐべきであるとして、満20歳以下と年齢を限った大会を開催した。軽量級・川口孝夫（明治大）、中量級・藤猪省三（天理大）、重量級・遠藤純男（日本大）がそれぞれ優勝。	
	4.29 **全日本柔道選手権大会**（日本武道館）　世界王者の篠巻政利（新日本製鉄）が初の日本一に。②河原月夫（明治大）、③園田　勇（丸善石油）、安斉奏人（倉敷レイヨン）	
	4.30 **全日本実業柔道連盟が全柔連に加盟**　昭和38年に加盟申請が出されていた。学柔連と同様に規約第5条を改正し、評議員会にて承認。	5.13 **ミュンヘン五輪柔道競技は6階級に**　IOC総会において決定。また、各国各階級2名代表の要求は認められず、従来どおり1名ずつとなった。
	6.7 **第20回全日本実業団対抗柔道大会**（徳山市）　1部・①新日本製鉄、②東レ滋賀。2部・①新日鉄広畑、②丸善石油下津。“世紀の合併”により誕生した新日鉄が完全優勝。	5.29－31 **第2回アジア柔道選手権大会**（台湾・高雄）　軽量級・川口孝夫（明治大）、軽中量級・野村豊和（天理大）、軽重量級・河原月夫（明治大）、重量級・二宮和弘（天理大）、無差別は西村昌樹（正気塾）が河原月夫を降し、それぞれ優勝。中量級・後藤誠一（中央大）は2位。国別試合も無失点で優勝。
	6.13－14 **第19回全日本学生柔道優勝大会**（日本武道館）　①天理大、②明治大、③拓殖大、日本大	
	6.28 **第7回全警察・全実業・全学生対抗柔道試合**（警視庁武道館）　選手は軽量級5名、中量級6名、重量級9名による計20名で点取り試合。全警察が全実業と引分、学生を9-3で下し連続優勝。	6.25 **日ソ対抗柔道試合**（講道館）　来日したソ連チームは、事情により選手は2名のみではあったが、3千人の観客を集めて、高校生紅白試合に続き、親善試合を行った。
	7.8 **全国警察柔道選手権大会**（日本武道館）　①堀口憲一（熊本）、②川端智幸（大分）、③伊神重則（愛知）、山元俊隆（愛知）	
	7.22－23 **第44回金鷲旗争奪高校柔道大会**（九電記念体育館）　①鎮西（熊本）、②大牟田（福岡）、③嘉穂（福岡）、鹿児島実業（鹿児島）	
	8.3－5 **第19回全国高等学校柔道大会**（和歌山市）　団体：鎮西（熊本）が天理（奈良）の3連覇を阻み優勝。③鹿児島実業（鹿児島）、安房（千葉）。個人：軽量級・森脇保彦（崇徳）、中量級・光本正輝（天理）、重量級・須藤　十（日大山形）がそれぞれ優勝。軽量級は3年連続で崇徳勢が制した。	8.4 **日米高校親善柔道大会**（和歌山）　高校総体の見学を兼ねて来日中の米国高等学校柔道親善使節団の一行と全日本高校選抜が対戦した。10-0、10-1と圧勝。この後、京都、岡山、福岡で親善試合を重ねた。
	8.9 **第4回全日本選抜柔道体重別選手権大会**（鹿児島県立体育館）　軽量級・湊谷　弘（金沢工大教）、中量級・園田　勇（丸善石油）、軽重量級・笹原富美雄（神奈川県警）がそれぞれ連覇。重量級・高木長之助（日本大）が初優勝。	
	8.21 **第1回全国高等学校定時制通信制柔道大会**　全国高校定時制・通信制振興会を中心にして、定時制及び通信制高校生の柔道発展を目指して始まった。団体：新潟県が優勝。	
	8.23 **第1回全国中学校柔道大会**（講道館）　藤園中（熊本）が初代中学王座に。②那珂中（福岡）、③	

年	全柔連の歴史・国内の柔道界	世界の柔道及び日本の成績
	大仁中（静岡）、蘇我中（千葉） 10.11－13 **第25回国民体育大会柔道競技**（久慈市）　競技別総合・①福岡。一般男子・①東京=V２、②熊本。教員男子・①長崎=V２、②和歌山。高校男子・①福岡、②奈良 10.27 **全国警察柔道大会**（日本武道館）　1部・①警視庁、②大阪。2部・①神奈川、②富山 11.3 **第16回全日本東西対抗柔道大会**（奈良市）　所属都道府県選手1名を含む30名編成の勝ち抜き試合。西軍が不戦３人で３連勝。通算成績は西軍の12勝2敗2引分。以降休止。 11.7－8 **第23回全日本学生柔道選手権大会**（大阪府立体育会館）　軽量級・津沢寿志（中央大）=V３、中量級・後藤誠一（中央大）=V２、選手権・河原月夫（明治大）がそれぞれ優勝。 11.8 **第23回全日本学生東西対抗柔道試合**（大阪府立体育会館）　東軍が８人を残し優勝。 11.12－13 **第19回全国青年大会柔道競技**（講道館）　団体：高知市、角田市。軽量級・楢原和正（大阪）、中量級・今村佳史（神奈川）、無差別・立山（熊本）がそれぞれ優勝。 11.15 **第6回全日本選抜柔道団体優勝大会**（愛知県体育館）　①明治大、②新日本製鉄、③天理大、東洋レーヨン 11.22 **第18回全日本産業別柔道大会**（講道館）　繊維部門が優勝。	9.18 **日独対抗柔道大会**（日本武道館）　軽量２・中量２・軽重量２・重量３の団体11人戦を行い、9－0（2引分）で西ドイツを圧倒。
昭和46 (1971)	1.1 **日本体育協会アマチュア規定の制定**　「アマチュアのあり方」及び「日本体育協会アマチュア規定」 4.11 **第2回全日本新人柔道体重別柔道選手権大会**（講道館）　大会名を改称。軽量級・南　喜陽（新日鉄広畑）、中量級・吉村和郎（日本大）、重量級・吉永浩二（明治大）がそれぞれ優勝。 4.29 **全日本柔道選手権大会**（日本武道館）　岩釣兼生（兵庫県警）が初優勝。補欠から繰り上げ出場の佐藤宣践（東海大教）が2位。③村井正芳（新日本製鉄）、二宮和弘（正気塾） 5.25 **全国警察柔道選手権大会**（日本武道館）　坂本羯正（熊本）が初優勝、②西村忠由（大阪）、③川端智幸（大分）、上野武則（福岡） 5.30 **第21回全日本実業団対抗柔道大会**（松本市）　1部・①新日本製鉄、②和歌山県教育委員会。2部・①三井建設、②日本運送	2.6 **フランス国際招待柔道大会**（パリ）　プレオリンピックと銘打ってのヨーロッパ9ヵ国の招待選手権大会に、有望新人選手３名を派遣。中量級・藤猪省三（天理大）、軽重量級・河原月夫（明治大）が優勝。重量級・中川良夫（早稲田大）は準決勝で負傷棄権。

年	全柔連の歴史・国内の柔道界	世界の柔道及び日本の成績
	6.12－13 **第20回全日本学生柔道優勝大会**（日本武道館）明治大が内容差で中央大を下し、3年ぶりの優勝。③国士舘大、日本大 6.20 **第8回全警察・全実業・全学生対抗柔道試合**（講道館）　第1試合全警察対全学生の副将戦、前田行雄（警視庁）が岩田久和（明治大）との対戦中に心筋梗塞により死亡。この事故により大会は中止となった。 7.11 **第5回全日本選抜柔道体重別選手権大会**（九電体育館）　“世界一”が総崩れ波瀾の大会を、軽量級・津沢寿志（正気塾）、中量級・関根　忍（警視庁）、軽重量級・佐藤宣践（東海大教）、重量級・山本裕祥（旭化成）がそれぞれ制した。 7.24－25 **第45回金鷲旗争奪高校柔道大会**（九電記念体育館）　①鹿児島実業（鹿児島）、②嘉穂（福岡）、③福岡大大濠（福岡）、鎮西（熊本） 8.2－4 **第20回全国高等学校柔道大会**（松山市）　団体：①天理（奈良）＝5度目、②福岡大大濠（福岡）、③鹿児島実業（鹿児島）、習志野（千葉）。個人：軽量級・香月清人（初芝）、中量級・阪口和秋（熊本一工）、重量級・田中弘一（鎮西）がそれぞれ優勝。 8.4 **日本武道館研修センター竣工**　千葉県勝浦市の太平洋を眼下に見下ろす高台に、千畳敷の道場、320余名宿泊施設等。 8.15 **第2回全国中学生柔道大会**（講道館）　藤園中（熊本）が久慈中（茨城）を5-0で圧倒し連覇。③昭栄中（佐賀）、桂中（京都）。文部省が全国大会を認めず、「中学生大会」として実施。 8.24 **第2回全国高等学校定時制通信制柔道大会**（講道館）　共催の全国高体連から強い要請を受け、全柔連も共催に加わった。団体：福岡が優勝。 8.29 **第1回全日本実業柔道個人選手権大会**（大阪市立修道館）　「柔道の本質の拡大強化」として年齢別試合を新設。1部（30歳以上）・古賀　武（新日鉄八幡）、2部（25～30歳）・村井正芳（新日鉄広畑）、3部（20～25歳）・佐々木　均（旭化成）、4部（20歳未満）・南　喜陽（新日鉄広畑）がそれぞれ優勝。新日鉄勢が3タイトル獲得。 10.13 **全国警察柔道大会**（日本武道館）　1部・①大阪、②警視庁。2部・①愛媛、②北海道 10.25－26 **第26回国民体育大会柔道競技**（和歌山市）　競技別総合・①和歌山。一般男子・①大阪、②兵庫。教員男子・①和歌山、②大分。高校男子・①和歌山、②奈良	8.29 **消極的柔道に反則適用**　IJFスポーツ委員会にて、「組もうとしない者」「腕を突っ張って技を掛けようとしない者」に対して「指導」「注意」などの罰則を適用することに決定。 9.2－4 **第7回世界柔道選手権大会**（西ドイツ・ルドウィグスハーフェン）　6階級中4階級で日本勢の決勝、5個の金メダル。軽量級・①川口孝夫（明治大）、②野村豊和（天理大）。軽中量級・①津沢寿志（正気塾）、②湊谷　弘（金沢工大教）。中量級・①藤猪省三（天理大）、②重松正成（明治大）。軽重量級・①笹原富美雄=V2（神奈川県警）、②佐藤宣践（東海大教）。重量級・③岩田久和（明治大）、岩釣兼生は3回戦敗退。無差別・①篠巻政利（新日本製鉄）=V2、③関根　忍（警視庁） 日本選手団：団長・浜野正平、監督・松本安市、コーチ・神永昭夫、日本人審判員：醍醐敏郎、大澤慶己、橋元　親

年	全柔連の歴史・国内の柔道界	世界の柔道及び日本の成績
	11.6－7 **第23回全日本学生柔道選手権大会**（大阪府立体育会館）　軽量級・野村豊和（天理）、中量級・原吉実（明治）、選手権・遠藤純男（日本）がそれぞれ優勝。 11.7 **第23回全日本学生東西対抗柔道試合**（大阪府立体育会館）　東軍、不戦４人で連勝。 11.11－12 **第20回全国青年大会柔道競技**（講道館）　団体：新潟。軽量級・角田真治（大阪）、中量級・竹中幸男（石川）、無差別・里村敏一（新潟）と前田敏一（愛知）がそれぞれ優勝。 11.14 **第７回全日本選抜柔道団体優勝大会**（愛知県体育館）　①新日本製鉄、②警視庁、③神奈川県警、明治大 11.23 **第19回全日本産業別柔道大会**（講道館）　鉄鋼部門が優勝。 11.28 **第３回全日本新人体重別柔道選手権大会**（大阪市中央体育館）　軽量級・磯部正博（日本体育大）、中量級・永野盛雄（中央大）、重量級・白瀬英春（東海大）がそれぞれ優勝。	10.22－24 **国際学生柔道選手権大会**（ポーランド・グダヌスク）　グダヌスクオリンピック委員会創立50周年記念として行われた。軽量級・①焼丸　真（近畿大）。軽中量級・①吉村和郎（日本大）。中量級・③中村茂晴（日本体育大）。軽重量級・③中村均（国士舘大）。重量級・上村春樹（明治大）。団体・優勝。
昭和47（1972）	4.29 **全日本柔道選手権大会**（日本武道館）　中量級の関根　忍（警視庁）が初優勝。②岩田久和（新日本製鉄）、③西村昌樹（やよいエージェンシー）、佐藤宣践（東海大教）。全試合の半分以上を判定勝が占めた。 4.30 **沖縄県柔道連盟、全柔連に正式加盟**　昭和28年５月より「特別加盟」。47年５月15日をもって日本への復帰が認められることになり、いち早く沖縄県柔道連盟から正式加盟の手続きがなされた。４月30日の全柔連評議員会において、日本復帰の５月15日付をもって加盟承認と決定した。 5.23 **全国警察柔道選手権大会**（日本武道館）　①笹原富美雄（神奈川）、②高木長之助（警視庁）、③川端智幸（大分）、合田多利（警視庁） 6.10－11 **第21回全日本学生柔道優勝大会**（日本武道館）　明治大が連覇=12回目、②国士舘大、③青山学院大、中央大 6.18 **第９回全警察・全実業・全学生対抗柔道試合**（講道館）　選手は軽量級５名、中量級６名、重量級９名による計20名での点取り試合。全実業５-1全学生、全学生４-４（内容差で学生）全警察、全警察５-2全実業と１勝1敗となり、勝者数合計によって警察が優勝。 7.2 **第６回全日本選抜柔道体重別選手権大会**（福岡市民体育館）　軽量級・南　喜陽（新日本製鉄）、	2.12－13 **ソ連国際スポーツ大会**（トビリシ）　選手３名を派遣。７ヵ国が参加。重量級・二宮和弘（正気塾）が優勝。無差別決勝は遠藤純男（日大）が村井正芳（新日鉄）を背負投で破って優勝

年	全柔連の歴史・国内の柔道界	世界の柔道及び日本の成績
	軽中量級・野村豊和（博報堂）、中量級・園田　勇（福岡県警）＝3度目、軽重量級・笹原富美雄（神奈川県警）＝3度目、重量級・西村昌樹（やよいエージェンシー）がそれぞれ優勝。	
	7.9　**第22回全日本実業団対抗柔道大会**（広島市）　1部・①新日本製鉄、②博報堂。2部・①新日鉄広畑、②新日鉄堺	7.19－22　**第3回世界大学柔道選手権大会**（イギリス・ロンドン）　軽量級・伊志嶺朝秋（東洋大）、軽中量級・光本正輝（天理大）、中量級・吉永浩二（明治大）、軽重量級・恵谷正雄（大東文化大）、重量級・上村春樹（明治大）がそれぞれ優勝。団体も制し完全優勝。
	7.23－24　**第46回金鷲旗高校全国柔道大会**（福岡市民体育館）　①鹿児島実業（鹿児島）＝V2、②南筑（福岡）、③福岡大大濠（福岡）、鎮西（熊本）。今大会より、全柔連後援となった。	
	8.2－4　**第21回全国高等学校柔道大会**（鶴岡市）　団体：①天理（奈良）が連覇＝6度目、②鹿児島実業（鹿児島）、③砺波工業（富山）、明大中野（東京）。個人：軽量級・香月清人（初芝）＝V2、中量級・藤井正人（近大福山）、重量級・内山文雄（砺波工業）がそれぞれ優勝。	
	8.15　**第3回全国中学生柔道大会**（講道館）　①藤園中（熊本）＝V3、②鴨池中（鹿児島）、③国東中（大分）、磐梨中（岡山）	
	8.22　**第3回全国高等学校定時制通信制柔道大会**（講道館）　団体：神奈川が優勝。	8.22　**IJF総会**（ミュンヘン）　イタリアから女子柔道試合についての提案がされていたが、取り下げたことにより審議の対象とはならず。次回に五大陸の各連盟で検討した規定案を持ち寄り、審議することとなった。
	8.27　**第2回全日本実業柔道個人選手権大会**（福岡市民体育館）　1部・村井正芳（新日製広畑）、2部・山本裕祥（旭化成）、3部・岩田久和（新日本製鉄）、4部・渡辺一男（新日鉄広畑）がそれぞれ優勝。	8.31－9.5　**オリンピック・ミュンヘン大会**（西ドイツ）　6階級中軽量3階級のみ制覇。軽量級・川口孝夫（明治大）、軽中量級・野村豊和（博報堂）、中量級・関根　忍（警視庁）が金メダル。重量級・西村昌樹（やよいエージェンシー）が銅メダル。軽重量級・笹原富美雄（神奈川県警）は2回戦敗退。無差別・篠巻政利は3回戦敗退。 日本選手団：監督・浜野正平（強化委員長・ニュージャパン柔道協会）、コーチ・神永昭夫（新日本製鉄）、なお、篠巻が選手団旗手を務めた。 日本人審判員：清水正一（日本体育大教）、広瀬巌（大阪府警）。
	10.17　**全国警察柔道大会**（日本武道館）　1部・①警視庁、②大阪。2部・①熊本、②石川	
	10.23－25　**第27回国民体育大会柔道競技**（出水市）　競技別総合・①鹿児島。一般男子・①東京、②鹿児島。教員男子・①大分、②鹿児島。高校男子・①鹿児島、②広島	
	11.4－5　**第24回全日本学生柔道選手権大会**（大阪府立体育会館）　軽量級・光本正輝（天理）、中量級・宇津木房夫（早稲田）、選手権・上村春樹（明治）がそれぞれ優勝。	
	11.5　**第24回全日本学生東西対抗柔道試合**（大阪府立体育会館）　東軍、不戦5人で3連勝。	
	11.9－10　**第21回全国青年大会柔道競技**（講道館）　団体：神奈川。軽量級・森山初男（熊本）、中量級・真鍋満（愛媛）、無差別・杉浦裕介（富山）がそれぞれ優勝。	

年	全柔連の歴史・国内の柔道界	世界の柔道及び日本の成績
	11.12 **第8回全日本選抜柔道団体優勝大会**（愛知県体育館）　①新日本製鉄=V２、②博報堂、③明治大、旭化成 11.19 **第４回全日本新人柔道体重別選手権大会**（大阪市中央体育館）　軽量級・秋本勝則（鎮西高）が初の高校生王者に。中量級・塩川哲也（中央大）、重量級・奥田元則（天理大）がそれぞれ優勝。 11.23 **第20回全日本産業別柔道大会**（講道館）　繊維部門が優勝。 11.25 **講道館創立90周年記念式典　挙行** 11.26 **講道館創立90周年記念全日本年齢別柔道選手権大会**（講道館）　Ａ組（18歳未満）・①加瀬次郎（修徳高）、②吉岡　剛（嘉穂高）。Ｂ組（28歳未満）・①二宮和弘（福岡県警）、②諸井三義（神奈川県警）。Ｃ組（38歳未満）・①村井正芳（新日本製鉄）、②古賀　武（新日本製鉄）。Ｄ組（38歳以上）・①松本剛儀（佐賀県警）、②袴田　稔（神奈川県警）	
昭和48 (1973)	4.29 **全日本柔道選手権大会**（日本武道館）　上村春樹（旭化成）が初優勝、②高木長之助（警視庁）、③藤猪省三（クラレ）、諸井三義（神奈川県警） 5.4 －5 **復帰記念・沖縄特別国体柔道競技**（首里高校）一般20県、高校20校の代表チームの参加。一般・①熊本、②青森、③滋賀、沖縄。高校・①宮崎、②佐賀、③沖縄、広島 5.22 **全国警察柔道選手権大会**（日本武道館）　①二宮和弘（福岡）、②西村忠由（大阪）、③堀口憲一（熊本）、国重健治（香川） 6.10 **第23回全日本実業団対抗柔道大会**（岐阜市）１部・①新日本製鉄、②旭化成。２部・①新日鉄広畑、②三菱重工名古屋 6.30 －7.1 **第22回全日本学生柔道優勝大会**（日本武道館）①天理大、②明治大、③東海大、東京教育大 7.8 **第10回全警察・全実業・全学生対抗柔道試合**（警視庁武道館）　軽量級５名、中量級６名、重量級９名による計20名点取り試合。昨年に続き1勝1敗で三者が並び、勝数合計により警察が５度目の優勝。 7.23 －24 **第47回金鷲旗高校柔道大会**（福岡市民体育館）①鹿児島実業（鹿児島）=V３、②嘉穂（福岡）、③九州学院（熊本）、崇徳（広島）。今大会より、全国オープン参加となった。	1.27 **第２回フランス国際柔道大会**（パリ）　参加10ヵ国。出場した４階級を制覇。軽量級・南　喜陽（新日本製鉄）、中量級・園田　勇（福岡県警）、軽重量級・上口孝文（出水学園教）、重量級・二宮和弘（福岡県警）がそれぞれ優勝。 3.9 －11 **ソ連国際柔道大会**（トビリシ）　３名出場。重量級・①高木長之助（警視庁）、②岩田久和（新日本製鉄）、無差別・①遠藤純男（日本大） 6.22 －24 **第８回世界柔道選手権大会**（スイス・ローザンヌ）　４階級で日本勢の決勝戦、２度目の全６階級完全制覇。軽量級・①南　喜陽（新日本製鉄）、②川口孝夫（丸善石油）。軽中量級・①野村豊和（博報堂）、③吉村和郎（警視庁）。中量級・①藤猪省三=V２、②園田　勇（福岡県警）。軽重量級・①佐藤宣践=２度目、②上口孝文（警視庁）。重量級・①高木長之助（警視庁）、篠巻政利（新日本製鉄）は１回戦で負傷棄権。無差別・①二宮和弘（福岡県警）、②上村春樹（旭化成）。 日本選手団：団長・広瀬　巌（強化委員長）、監督・醍醐敏郎（強化委員）、コーチ・岡野　功（強化委員） 日本人審判員：橋元　親（天理大教）、大澤慶己（早稲田大教）、清水正一（日本体育大教）

年	全柔連の歴史・国内の柔道界	世界の柔道及び日本の成績
	8.2－4　**第22回全国高等学校柔道大会**（名張市）　団体：①嘉穂（福岡）、②鎮西（熊本）、③崇徳（広島）、高松工芸（香川）。個人：軽量級・望月充久（清水市商）、中量級・戸田　聡（日大藤沢）、重量級・山下泰裕（九州学院）がそれぞれ優勝。 8.15　**第4回全国中学生柔道大会**（仙台市）　①九州学院中（熊本）、②嵯峨中（京都）、③大橋中（兵庫）、辰野中（長野） 8.26　**第3回全日本実業個人選手権大会**（大阪市修道館）　1部・藤猪省三（クラレ岡山）、2部・鳥海又五郎（博報堂）、3部・深沢嘉直（博報堂）、4部・横田輝隆（新日鉄堺）がそれぞれ優勝。 8.26　**第4回全国高等学校定時制通信制柔道大会**（講道館）　団体：山形が優勝。 10.15－17　**第28回国民体育大会柔道競技**（館山市）　競技別総合・①千葉。一般男子・①東京=V2、②千葉。教員男子・①千葉、②和歌山。高校男子・①福岡、②鹿児島 10.30　**全国警察柔道大会**（日本武道館）　1部・①警視庁=V2、②神奈川、2部・①福岡、②大分 11.3－4　**第25回全日本学生柔道選手権大会**（大阪府立体育会館）　軽量級・蔵本孝二（拓殖）、中量級・松本　薫（天理）、選手権・白瀬英春（東海）がそれぞれ優勝。 11.4　**第25回全日本学生東西対抗柔道試合**（大阪府立体育会館）　西軍、不戦5人で8年ぶりに優勝。 11.7－8　**第22回全国青年大会柔道競技**（講道館）　団体：守口市。軽量級・茂手木健二（茨城）、中量級・大坂徳一（秋田）、無差別・中村洋一（大阪）がそれぞれ優勝。 11.11　**第9回全日本選抜柔道団体優勝大会**（愛知県体育館）　①警視庁、②博報堂、③旭化成、新日本製鉄 11.23　**第21回全日本産業別柔道大会**（講道館）　繊維部門が連覇。 11.24　**第5回全日本新人柔道体重別選手権大会**（札幌市）　軽量級・秋本勝則（拓殖大）=V2、中量級・栗崎誠三（拓殖大）、重量級・吉岡　剛（嘉穂高）がそれぞれ優勝。	9.22－10.8　**日朝スポーツ交流**　朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）の招聘により、細川熊蔵団長以下14名が平壌にて親善試合及び稽古を行った。 10.31－11.1　**敗者復活戦の勝者は3位に**　IJFスポーツ委員会（ロンドン）において「優勝者はその大会の一連の試合に一度も負けた事のない者を原則とする」との総会決議を受けて、敗者復活戦の最終勝者2名を共に3位とした。審判規定の改正、抑え込みが宣告された後において、場内外間際の試合者を「そのまま」と宣告して、試合場内に引き戻すことは廃止し、試合者の一方の身体の一部でも試合場内に触れている場合は継続とする。「有効」「効果」のゼスチャーの制定。など 女子柔道は、IJFの管轄下に行われることとなり、各大陸連盟での案を持ち寄り次回討議することとなった。また、五大陸の中で3大陸が女子選手権を実施し、その成果が挙がれば女子世界選手権を催し、オリンピックにも採用する。その目標を1980年のオリンピックに置くとの申し合せが行われた。
昭和49（1974）	3.27　**日本女子柔道の初試合**　講道館女子部道場にて、初の女子柔道の公開試合を行った。選手は3段3、2段4、初段3、1級6の計16名。トーナメント4回戦まで実施し、決勝は行わず。	2.2　**フランス国際柔道大会**（パリ）　3階級に3名出場。12ヵ国99名。軽中量級・古川　宏（天理大）及び重量級・遠藤純男（警視庁）が優勝。中量級・原　吉実（明治大）は僅差で敗れ3位。

年	全柔連の歴史・国内の柔道界	世界の柔道及び日本の成績
	5.5 **全日本柔道選手権大会**（日本武道館）　佐藤宣践（東海大教）が初優勝、②二宮和弘（福岡県警）、③重松義成（博報堂）、遠藤純男（警視庁） 5.22 **全国警察柔道選手権大会**（日本武道館）　①遠藤純男（警視庁）、②高木長之助（警視庁）、③上口孝文（警視庁）、二宮和弘（福岡県警） 6.9 **第24回全日本実業団対抗柔道大会**（鳥取市）　1部・新日本製鉄が0-0から代表戦8人目で旭化成を降し5連覇。2部・①新日鉄広畑、②旭化成 6.22－23 **第23回全日本学生柔道優勝大会**（日本武道館）　天理大が連覇、通算7度目。②東京教育大、③明治大、日本大 7.7 **第7回全日本選抜体重別柔道選手権大会**（福岡市民体育館）　軽量級・南　喜陽（新日本製鉄）=V2、軽中量級・蔵本孝二（神奈川県警）、中量級・藤猪省三（京都産大教）、軽重量級・岩田勝彦（宮崎県警）、重量級・遠藤純男（警視庁）がそれぞれ優勝。 7.13 **第6回全日本新人柔道体重別選手権大会**（講道館）　軽量級・八反田耕二（天理大）、秋本勝則（拓殖大）=V3、中量級・七条和己（天理大）、軽重量級・高橋政男（天理大）、重量級・吉岡　剛（嘉穂）=V2、がそれぞれ優勝。 7.23－24 **第48回金鷲旗高校柔道大会**（福岡市民体育館）　①九州学院（熊本）、②国士舘（東京）、③鎮西（熊本）、嘉穂（福岡） 8.2－4 **第23回全国高等学校柔道大会**（飯塚市）　団体：地元・嘉穂が連覇、②鎮西（熊本）、③近大福山（広島）、天理（奈良）。個人：軽量級・寺町良次（新田）、中量級・西田孝宏（大牟田）、重量級・吉岡　剛（嘉穂）がそれぞれ優勝。 8.16 **第5回全国中学生柔道大会**（講道館）　東海中（愛知）が熊本勢の5連覇を阻み優勝、②天明中（熊本）、③吉田中（埼玉）、鹿児島南中（鹿児島） 8.25 **第4回全日本実業柔道個人選手権大会**（大阪市立修道館）　1部・組坂英満（博報堂）、2部・佐々木伸行（東レ滋賀）、3部・薦田茂久（旭化成）、4部・渡辺一男（新日鉄広畑）がそれぞれ優勝。 8.25 **第5回全国高等学校定時制通信制柔道大会**（講道館）　団体：千葉が優勝。 10.21－23 **第29回国民体育大会柔道競技**（日立市）　競技別総合・①東京。一般男子・①東京=V3、②神奈川。教員男子・①茨城、②和歌山。高校男子・①福	2.15－17 **ソ連国際柔道大会**（トビリシ）　5階級に5名出場。12ヵ国100名。軽量級・①伊志嶺朝秋（日本中央競馬会）、中量級・③吉永浩二（明治大）、重量級・①上村春樹（旭化成）。IJF新規定により「有効」「効果」が加わったが、周知不足により混乱も。 3.13 **日英対抗柔道大会**（講道館）　日本選抜チームと英国ナショナルチームとの親善試合が行われ、6-0で快勝。 9.14－15 **第1回世界ジュニア柔道選手権大会**（ブラジル・リオ）　3階級に出場し、軽中量級・秋本勝則（拓殖大）、中量級・七条和己（天理大）、重量級・吉岡　剛（嘉穂高）が共に優勝。

年	全柔連の歴史・国内の柔道界	世界の柔道及び日本の成績
	岡=V2、②東京 10.29 **全国警察柔道大会**（日本武道館）　1部・①警視庁=V3、②大阪、2部・①京都、②愛媛 11.2－3 **第26回全日本学生柔道選手権大会**（大阪府立体育会館）　軽量級・古川　宏（天理）、中量級・野瀬清喜（東京教育）、選手権・喜納政美（日本）がそれぞれ優勝。 11.3 **第26回全日本学生東西対抗柔道試合**（大阪府立体育会館）　東軍、不戦2人で優勝。 11.8－9 **第23回全国青年大会柔道競技**（講道館）　団体：飯塚市。軽量級・吉留義文（福岡）、中量級・大北友義（北海道）、無差別・津志田広人（熊本）がそれぞれ優勝。 11.10 **第10回全日本選抜柔道団体優勝大会**（愛知県体育館）　神奈川県警が初優勝、②大阪府警、③旭化成、新日本製鉄 11.23 **第22回全日本産業別柔道大会**（講道館）　繊維部門が3連覇。	10.26 **オーストリア国際柔道大会**（ウィーン）　プレ世界柔道選手権大会として開催。4階級に4名出場。軽量級・鈴木克美（東海大）、重量級・上村春樹（旭化成）が優勝。軽中量級・②伊志嶺朝秋（日本中央競馬会） 11.1－3 **第4回世界大学柔道選手権大会**（ベルギー・ブリュッセル）　軽量級・森脇保彦（国士舘大）、中量級・原　吉実（明治大）、軽重量級・石川裕章(中央大)、重量級・角張　力（天理大）、無差別・丸谷武久（明治大）の5階級及び団体で優勝。軽中量級・②五反田祝好（東海大） 11.2－4 **第3回アジア柔道選手権大会**（韓国・ソウル）全6階級制覇。軽量級・南　喜陽（新日本製鉄）、軽中量級・蔵本孝二（神奈川県警）、中量級・藤猪省三（京都産大教）、軽重量級・岩田勝彦（宮崎県警）がそれぞれ優勝。無差別は藤猪省三が重量級の遠藤純男（警視庁）を下し二冠。 11.16 **日本・東独親善柔道大会**（講道館）　東京選抜が勝つ。 11.30–12.1 **ヨーロッパ女子柔道選手権大会はじまる**　従来より7～8国で行われていたが、参加国を増やし今回を正式に「第1回」とした。
昭和50 (1975)	2.3 **日本柔道育英学会　発足** 4.29 **全日本柔道選手権大会**（日本武道館）　上村春樹（旭化成）が2年ぶりのV、②高木長之助（警視庁）、③山下泰裕（東海大相模高）、篠巻政利（新日本製鉄） **女子柔道試合2試合を公開**　全日本選手権において、形の演武のあと、女子の柔道の形、乱取に次いで、特選2組の女子の試合が初めて公開された。 5.7 **英国女王歓迎スポーツ模範演技**（代々木第二体育館）　来日中の英国・エリザベス女王及びエジンバラ公に日本スポーツの模範演技を紹介する催しがあり、柔道からは世界選手権者の乱取、女子柔道の形、指導稽古を行った。 5.14 **全国警察柔道選手権大会**（日本武道館）　①高木長之助（警視庁）、②上口孝文（警視庁）、③諸井三義（神奈川）、二宮和弘（福岡） 6.8 **第25回全日本実業団対抗柔道大会**（千葉市）1部・リーグ戦で3チームが1勝1敗で横並び、代表1名によるリーグ戦を制した旭化成が優勝、②博報堂。2部・①新日鉄広畑=V3、②三井建設 6.10 **「講道館柔道試合審判規定」改正**　「技ありに近い技」として「有効」が認められ、ゼスチャーが定	

年	全柔連の歴史・国内の柔道界	世界の柔道及び日本の成績
	められた。など	
	6.21－22 **第24回全日本学生柔道優勝大会**（日本武道館）日本大が東洋大を代表戦３回目で降し３度目の優勝。③明治大、東海大	
	7.23－24 **第49回金鷲旗高校柔道大会**（福岡市民体育館）東海大相模（神奈川）が初優勝し、“金鷲旗”が初めて関門海峡を渡った。②嘉穂（福岡）、③大牟田（福岡）、鎮西（熊本）	
	8.5－7 **第24回全国高等学校柔道大会**（日本武道館）団体：東海大相模が嘉穂（福岡）を代表戦で下し初優勝。③鹿児島商業（鹿児島）、天理（奈良）。個人：軽量級・阿部新二（加茂水産）、中量級・西田孝宏（大牟田）=V２、重量級・山下泰裕=２度目、がそれぞれ優勝。	
	8.16 **第６回全国中学生柔道大会**（講道館）　①九州学院中（熊本）、②北本中（埼玉）、③新居中（静岡）、香椎一中（福岡）	
	8.24 **第６回全国高等学校定時制通信制柔道大会**（講道館）　団体：千葉=V２、個人：清水英二（神奈川）が優勝。	
	8.30 **第５回全日本実業柔道個人選手権大会**（大阪市立修道館）　１部・山家久博（東レ滋賀）、２部・小林次男（博報堂）、３部・竹下盛史（川鉄千葉）、４部・斎藤宣明（東レ滋賀）がそれぞれ優勝。	
	9.7 **第８回全日本選抜柔道体重別選手権大会**（福岡市民体育館）　軽量級・柏崎克彦（多賀高教）、軽中量級・蔵本孝二（神奈川県警）=V３、中量級・園田　勇（福岡県警）＝４度目、軽重量級・石橋道紀（日本大）、重量級・上村春樹（旭化成）がそれぞれ優勝。	
	10.15 **全国警察柔道大会**（日本武道館）　１部・①警視庁=V4、②福岡県。２部・①熊本、②富山	10.22 **IJF総会**（ウィーン）　パーマー会長３選、川村禎三・スポーツ理事再選。
	10.27－29 **第30回国民体育大会柔道競技**（名張市）　国体の全種目共通で全面的に改編されることになり、参加資格は４月１日現在で18歳以上の者を成年の部、18歳未満に者を少年の部の二本建てとなった。競技別総合・①三重。成年男子（一般）・①東京=V4、②宮崎。成年男子（教員）・①和歌山、②三重。少年男子・①神奈川、②愛媛	10.23－25 **第９回世界柔道選手権大会**（オーストリア・ウィーン）　ソ連・東欧勢に苦戦し４階級制覇にとどまる。軽量級・①南　喜陽（新日本製鉄）=V２、②柏崎克彦（多賀高教）。軽中量級・③秋本勝則（拓殖大）、③蔵本孝二（神奈川県警）。中量級・①藤猪省三（京都産大教）=V３。軽重量級・②石橋道紀（日本大）、岩田久和（新日本製鉄）は４回戦敗退。重量級・①遠藤純男（警視庁）、③高木長之助（警視庁）。無差別・①上村春樹（旭化成）、②二宮和弘（福岡県警）。 日本選手団：団長・広瀬　巌（強化委員長・近畿管区警察学校教）。監督・醍醐敏郎（警察大教）、コーチ・佐藤宣践（東海大教）。ドクター・関
	11.1－２ **第27回全日本学生柔道選手権大会**（大阪府立体育会館）　軽量級・五反田祝好（東海）、中量級・野瀬清喜（東京教育）=V２、重量級・知念利和（東海）がそれぞれ優勝	
	11.2 **第27回全日本学生東西対抗柔道試合**（大阪府立	

年	全柔連の歴史・国内の柔道界	世界の柔道及び日本の成績
	体育会館）　東軍、11人を残して連勝。 11.7－8　**第24回全国青年大会柔道競技**（講道館）　団体：金沢市。軽量級・西　和夫（石川）、中量級・荒瀬雅次（岡山）、無差別・正　寿暁（大阪）がそれぞれ優勝。 11.9　**第11回全日本選抜柔道団体優勝大会**（愛知県体育館）　①警視庁、②旭化成、③愛知県警、博報堂 11.23　**第23回全日本産業別柔道大会**（講道館）　繊維部門が４連覇。 11.30　**第７回全日本新人柔道体重別選手権大会**（福岡市民体育館）　軽量級・寺町良次（新田高）、軽中量級・名和孝徳（拓殖大）、中量級・日蔭暢年（国士舘大）、軽重量級・富田康之（東海大）がそれぞれ優勝。重量級は山下泰裕（東海大）が「三羽烏」の松井　勲（筑波大）、吉岡　剛（中央大）を一蹴して優勝。	口恒五郎（普及委員長） 日本人審判員：松本安市、神永昭夫、松下三郎 **敗者復活制度**　1965（昭和40）年のリオデジャネイロ世界選手権から続いた敗者復活方式における予選・決勝トーナメントの併用は、予選で一度負けても優勝することが可能であったため（ミュンヘン五輪では優勝者６名の内、半数の３名が敗者復活戦で勝ち上がった選手であった）、システムに疑問が投げかけられ、ウィーン世界選手権より敗者復活制度を改正。敗者復活戦の勝者を３位止りとした。これにより、トーナメントでの優勝者は一度も負けなかった者、３位は一度敗れた者のなかでの強者という、現在まで続く方式が確立された。1987（昭和62）年のベオグラードの世界選手権からは、３位決定戦で反対側のゾーンの選手と対戦するというヨーロッパ方式（ダブルリパチャージ）が採用されている。

敬称略。
段位は、頁の都合上割愛した。
大会記録は、講道館雑誌『柔道』各号に掲載されている大会記録を底本として、他の出版物、大会パンフレット等も参照した。
各階級の名称については、平成４年度より統一された名称である「kg級」をさかのぼって使用した。

参考・引用

嘉納先生伝記編纂会　1964『嘉納治五郎』講道館
全日本柔道連盟　1979『全日本柔道連盟創立30周年記念誌　30年の歩み』
講道館　1988　嘉納治五郎大系別巻『柔道試合記録』本の友社
講道館　1996　現代柔道人物叢書別巻『柔道試合記録』本の友社
『柔道』バックナンバー各号　講道館
『近代柔道』バックナンバー各号　ベースボール・マガジン社
『柔道新聞』バックナンバー各号　日本柔道新聞社
醍醐敏郎・佐藤宣践 監修　1986　激動のスポーツ40年史『戦後柔道その栄光と変遷 』ベースボール・マガジン社
ベースボール・マガジン社編　1989　激動の昭和スポーツ史16『柔道』ベースボール・マガジン社
工藤雷介・横尾一彦 監修　1984　ゴング９月号増刊『柔道100人』日本スポーツ出版社
財団法人日本体育協会　1965『東京オリンピック選手強化対策本部報告書』
財団法人日本体育協会　1970『日本スポーツ百年』
財団法人日本体育協会　1987『日本体育協会七十五年史』
財団法人日本オリンピック委員会　1994『近代オリンピック100年の歩み』ベースボール・マガジン社
全日本実業柔道連盟　1990『実業柔道40年の記録』日本学生柔道連盟　1992『学生柔道40年のあゆみ』
工藤雷介　『柔道新聞　縮刷版』第１～４巻　五月書房
『朝日新聞　縮刷版』朝日新聞社
『毎日新聞　縮刷版』毎日新聞社
『読売新聞　縮刷版』読売新聞社
尾形敬史・小俣幸嗣・鮫島元成・菅波盛雄　1998『競技柔道の国際化』不昧堂
竹内善徳・小俣幸嗣・尾形敬史　1999『柔道のルールと審判法』　大修館書店

編集後記

今秋、東京で52年ぶりに世界選手権が開催される。本年は講道館柔道の創始者、嘉納治五郎師範の生誕150周年でもある節目の年である。

52年前の世界選手権の参加国・地域は18であったのに対し、今回は100以上の国・地域から総勢千人近い関係者の参加が見込まれる。半世紀にわたる国際化の賜物であり、まさに隔世の感である。

柔道の国際化で忘れられない人物の一人が、1964年東京オリンピック柔道競技無差別の覇者、アントン・ヘーシンク氏（オランダ）であろう。1987年にはIOC委員に就任し、自ら発案したカラー柔道衣の導入で主導的役割を果たした。

ヘーシンク氏を強烈に印象づけたシーンに、東京五輪の無差別決勝で神永昭夫氏を袈裟固で破った際、歓喜のあまりに畳に駆け上がろうとしたオランダ人を制したことがあげられよう。後に「伝統的日本の心を持つ外国人柔道家」とも言われた所以である。

筆者はある時、戦後柔道の生き字引と言われた名物記者にこの話を向けたところ、烈火の如く反論されことがある。実は東京五輪に先立つ、1961年パリ世界選手権にて日本代表３選手をことごとく下して覇者となったヘ―シンク氏は、畳の上に土足の仲間を大勢招きあげて歓喜にひたったというのである。当時は、日本選手がよもや外国人に負けるとは思われなかった時代であった。「日本柔道パリに散る」と報じられたが、ヘ―シンク氏の試合後の行為は会場に居合わせた少数の関係者のみしか知られていない。

３年後、東京の地で再び覇者となったヘーシンク氏は、技とともに「心」を衆目に示した。強者でありながらも、柔道修業は人間修養の道であることを伝えた「伝道者」と言えよう。

さて、『柔道科学研究　第15号』をお届けします。研究・実践の果実によって、柔道の原点が正しく伝えられてゆくことを願ってやみません。

（渡邉昌史・早稲田大学）

発行日　2010年３月31日
発行者　射手矢　岬
発　行　㈶全日本柔道連盟強化委員会情報戦略部
〒112-0003　東京都文京区春日１-16-30　講道館内
TEL 03-3818-4199
FAX 03-3812-3995

印　刷　ダイコロ株式会社
〒540-6591　大阪市中央区大手前１-７-31
TEL 06-6944-6311
FAX 06-6944-6366